

新座市をキャンパスに！

＋(プラス) となる人づくり、街づくり

平成29年度 実績報告書

地(知)の拠点整備事業

目次

発刊のことば	02
--------	----

I 十文字学園女子大学 地(知)の拠点整備事業

1 概要	04
2 推進体制	05
3 地域志向教育カリキュラム	06

II 地域志向教育研究費

1 平成29年度採択研究プロジェクト	10
2 平成29年度実績報告	12

III 地域連携共同研究所

1 平成29年度採択研究プロジェクト	36
2 実績報告	36

IV 活動の記録

1 会議等	38
2 COC事業 地域連携フォーラム	39
3 社会貢献活動	40
4 ボランティアセンター	42
5 広報	43

V COC事業評価

1 自己点検・評価委員会	45
2 外部評価委員会	46

VI 資料

1 新聞掲載記事等	48
2 その他のメディア	52

発刊のことば

十文字学園女子大学 学長 志村 二三夫

本学は平成26年に「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)に採択されました。地元新座市との間に力強い連携協力を築かせて頂き、チャレンジングな合言葉“新座市をキャンパスに!+(プラス)となる人づくり、街づくり”を掲げ、Center of Community(地域の知の拠点)となれるよう取り組んでいます。この冊子は4年目の事業内容や成果・評価の報告書です。

多彩な取り組みの中でも、地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に活かすという視点で編成された地域志向教育カリキュラムによって、学生達は地域の皆様を先生として成長し、社会人基礎力を高めています。逆に、学生達の若さ・明るさ・優しさや、しなやか・大胆なアイデアは、ささやかながらも地域の元気に役立っています。この報告書からそうした様子を汲み取って頂ければ幸いです。

地域課題解決への貢献は、地域に根ざす本学の大切な使命です。新座市がめざす快適みらい都市のルーツは、この報告書にも登場する野火止用水による、荒れた台地から肥沃の地への変貌です。その野火止用水は、知恵伊豆こと松平伊豆守信綱のもとで、多くの人々がChieをしほり、Communicate(情報共有)し、Conceive(構想)し、Collaborate(協働)し、Challengeした成果です。Chieは課題解決に求められるデザイン思考の源泉です。

COC事業は平成30年度で終了ですが、地域課題解決には、野火止用水を貫徹させた先人のように、いくつかのCを束ねたCOC^xとして骨太で持続可能な取り組みへと発展させる必要があると思います。COCの取り組みで得られた貴重な経験や成果を糧に、新座市はもとより、より広く浸透・波及して近隣地域の課題解決に活かせるよう、取り組みの一般性も求められます。それらの萌芽や片鱗も本報告書に示されています。今回の分も合わせた各年の報告書は、こうした持続性・一般性の観点も含めて、このCOC事業の成果を評価し、COC^xへと繋ぐ重要な資料でもあります。

新座市長 並木 傑

十文字学園女子大学と本市が連携して取り組む「地(知)の拠点整備事業」(COC事業)につきまして、貴大学には本市をフィールドとした多分野にわたる研究を展開していただいておりますことに心から感謝申し上げます。

本市が掲げる「住んでみたい ずっと住み続けたい 魅力ある快適みらい都市」の実現に向けた取組については、市が一丸となって取り組んでいくことが必要であるため、大学との連携は欠かせないものとなっております。

そのような中で、貴大学におきましては、「十文字学園女子大学COC事業に係る新座市との意見交換会」(地域連絡協議会)や「+(プラス)キャンパス連絡会議」を始めとする意見交換の場を数多く設けていただいております。

さらに、「新座っ子ばわーあっぷくらぶ」や「子どもの放課後居場所づくり事業(ココフレンド)」を始めとする様々な市の事業において連携を深めていただいているとともに、あらゆる形で地域活動への参画を積極的に進めていただいております。

こうした貴大学の継続したご理解・ご協力につきまして、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、平成30年度までを事業期間とする当COC事業につきましては、残すところ1年となりましたが、貴大学との更なる連携の輪が広がっていくことを御期待申し上げますとともに、貴大学のますますのご発展を祈念いたしまして、平成29年度COC事業実績報告書発行に当たってのご挨拶とさせていただきます。



十文字学園女子大学 地(知)の拠点整備事業

I 十文字学園女子大学 地（知）の拠点整備事業（COC事業）

1 概要

地（知）の拠点整備事業（COC事業）は、自治体等と連携し、地域を志向した教育・研究・社会貢献を積極的に進める大学を国が支援する事業です。大学が地方創生を担う地域の「知」の拠点（Center of Community）となり、産学官民を越えた連携を生み出して、様々な問題解決に取り組み、さらには地域に必要な人材の育成を目指すものです。

本学は、平成26年度にCOC事業の採択を受け、「新座市をキャンパスに！+（プラス）となる人づくり、街づくり」をテーマに、新座市を中心としたエリアを学外キャンパス「+（プラス）キャンパス」として事業を展開し、この取り組みを通して得た経験・知見を近隣の連携自治体に広げていくことで、活力ある地域社会づくりに貢献することを目指しています。

◆ 十文字学園女子大学 COC事業のイメージ

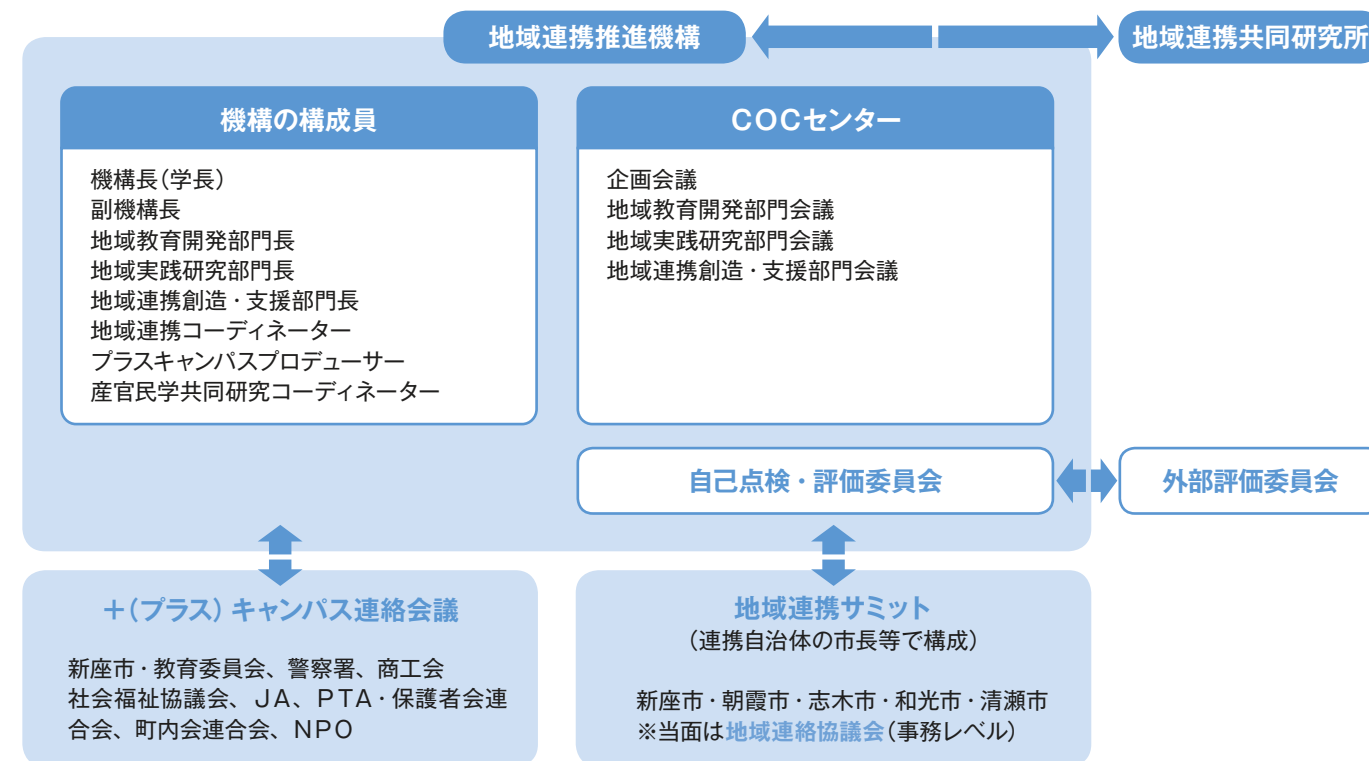


2 推進体制

現有の教育研究組織や大学開放・地域連携推進センター、学科、個々の教員が取り組んできた地域貢献の実績を集約し、学長のリーダーシップに基づいた全学的な取組として再構築した地域連携推進機構を平成26年1月に設置しました。機構は、学長をトップとし、地域連携活動の実績を有する教員、事務職員並びに専従職員とした地域連携コーディネーター等から構成しています。

また、教育、研究、社会貢献の推進の基盤となる「地域教育開発部門」「地域実践研究部門」「地域連携創造・支援部門」の3部門を設置しています。

さらに、産学官民の連携を推進するための会議体として、+（プラス）キャンパス連絡会議と地域連絡協議会を設置しています。



+（プラス）キャンパス連絡会議	地域の声やニーズを的確に把握するために設置
地域連携サミット（地域連絡協議会）	包括連携協定を締結している5市（新座、朝霞、志木、和光、清瀬）の市長、5市の教育長で構成する「地域連携サミット」を設置し、各市の現状、課題、本学への要望等について定期的に意見交換（当面は、事務レベルの職員で構成する地域連絡協議会がその役割を担う）
地域連携コーディネーター	地域からの要望（ニーズ）と本学の資源（シーズ）のマッチング活動を行う。
プラスキャンパスプロデューサー	+（プラス）キャンパスで行う学外での教育研究活動や地域貢献事業等の企画・実施の役割を担うとともに、学内外の調整役も果たす。

◆ 地域との連携体制の構築

- 持続的な地域連携を継続していくために、連携自治体と包括連携協定を締結して、活動基盤を強固にしている。

（包括連携協定を締結した連携自治体）

新座市 平成19年12月

和光市 平成21年10月

朝霞市 平成25年6月

志木市 平成25年8月

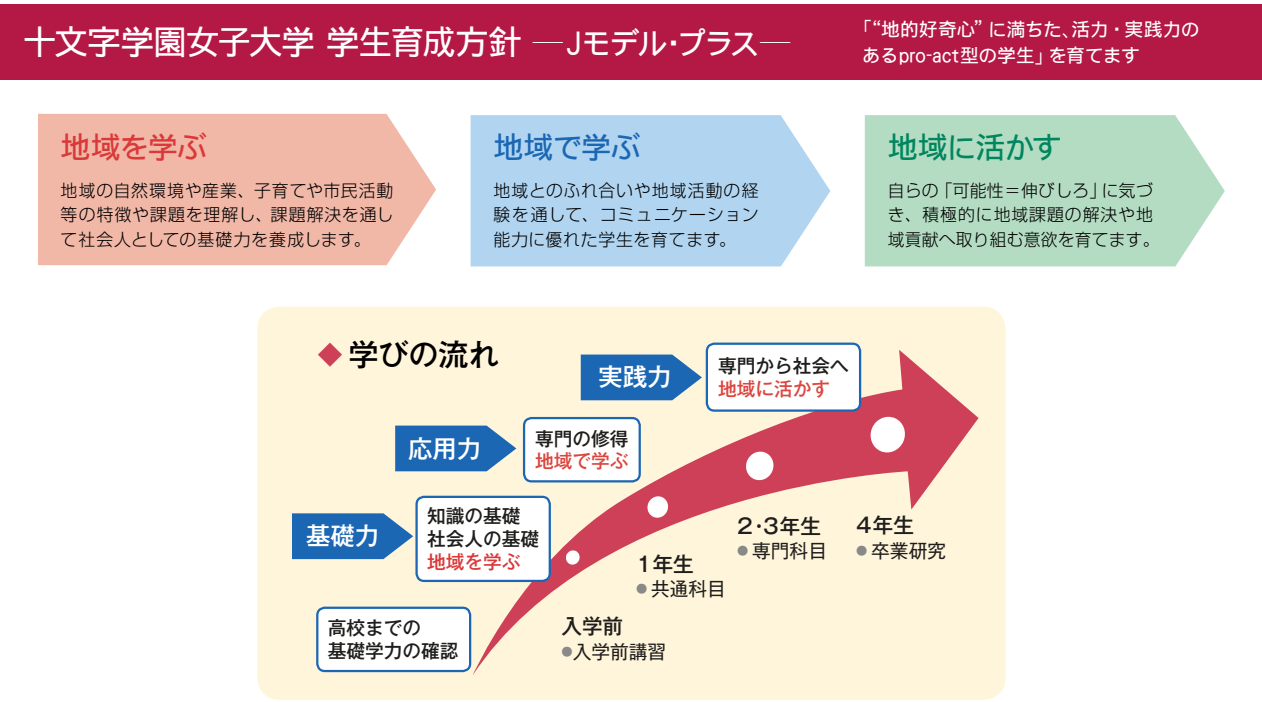
清瀬市 平成27年4月



3 地域志向教育カリキュラム

本学の目指す人材像である“地的好奇心”に満ちた、活力・実践力のあるpro-act型の学生を育てるための地域志向教育カリキュラムとして、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に活かす」の領域で教育課程を構築し、「学びのPDCA」による自立型学習の確立を目指しています。

具体的には、「地域志向科目」を共通科目と専門科目に反映した新カリキュラムを開発し、平成27年度から実践しています。1年次の「地域を学ぶ」、2・3年次の「地域で学ぶ」、4年次の「地域に活かす」の3つの柱からなります。





Ⅱ

地域志向教育研究費

Ⅱ 地域志向教育研究費

地域連携推進機構に、教育、研究、社会貢献の推進のための基盤となる「地域教育開発部門」「地域実践研究部門」「地域連携創造・支援部門」を設置し、教員の地域を志向した教育・研究等を推進するため、文部科学省の補助金を活用して「地域志向教育研究費」700万円を計上し、各部門ごとに研究プロジェクトを公募し、23件を採択しました。

(地域志向教育研究費の採択区分) (支給限度額：1件につき50万円)

研究助成種目	細目	
地域志向教育推進費 (予算300万円)	目的	授業を契機として学生による自主的な学びを支援し、活動を活性化する。
	概要	全学的、組織的な取組を推進するため、教員の創意工夫と自主性、自立性、及び参画意識を醸成する教育研究を支援する。
地域課題解決型研究推進費 (予算200万円)	目的	地域課題を解決するために、自治体等の担当者、複数学科の教職員を構成員として、実効性のあるプロジェクト研究を推進する。
	概要	地域における活動実績がある、もしくは研究実績のある教員がリーダーとなって地域課題解決に取り組む。
地域連携創造・支援事業費 (予算200万円)	目的	学生が地域自治体等とともに地域課題解決に取り組む活動を支援する。
	概要	新座市、市内NPO、ボランティアグループ等との連携による地域課題解決型教育・研究活動を行う。

(採択経過等)

平成29年4月～5月	「地域志向教育研究費」の公募要領に基づき学内公募、選考、採択
6月～2月	「地域志向教育研究費」採択事業の実施
平成30年4月	「地域志向教育研究費」採択事業実績報告書の提出

1 平成29年度採択研究プロジェクト

区分	助成費目	No.	研究課題名	研究代表者	実施年度			
					26	27	28	29
地域教育開発部門	地域志向教育推進費	1	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合	児童教育学科 教授 山本 悟		●	●	●
		2	地域密着型メディアによる情報発信	メディアコミュニケーション学科 准教授 棚谷 祐一		●	●	●
		3	新座市内の介護保険施設の利用者を対象とする傾聴ボランティア体験学習	人間福祉学科 准教授 大山 博幸	●	●	●	●
		4	地域志向科目での教材開発	メディアコミュニケーション学科 教授 石野 榮一		●	●	●
		5	地域志向教育実施のためのプログラム開発	メディアコミュニケーション学科 教授 安達 一寿		●	●	●
		6	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築	幼児教育学科 講師 権 明愛			●	●
		7	学生の自主活動による地域スポーツの活性化に関する実践プロジェクト～社会貢献体験型オープンゼミナール2【のりさん塾 継続版】～	カレッジスポーツセンター 准教授 石山 隆之			●	●
		8	中山間地域と都市部における人間形成力を活用した次世代地域づくり組織者を育成するカリキュラムの創造	児童教育学科 教授 狩野 浩二	●	●	●	●
		9	子ども元気プロジェクト2017	幼児教育学科 准教授 鈴木 康弘		●	●	●
		10	親子支援プロジェクト	人間福祉学科 准教授 山口 由美		●	●	●

区分	助成費目	No.	研究課題名	研究代表者	実施年度			
					26	27	28	29
地域実践研究部門	地域課題解決型研究推進費	11	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業	人間福祉学科 講師 久保田 葉子		●	●	●
		12	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討	幼児教育学科 教授 上垣内 伸子		●	●	●
		13	生活習慣病などの疾病と食事・運動との関連についての検討	食物栄養学科 教授 松本 晃裕				●
		14	新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究	幼児教育学科 教授 加藤 則子				●
		15	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み	人間発達心理学科 教授 布施 晴美	●	●	●	●
		16	親の主体的な子育てを可能とする地域支援の在り方の検討	幼児教育学科 教授 向井 美穂	●	●		●
		17	サトイモの親芋活用プロジェクト	健康栄養学科 教授 高橋 京子			●	●
地域連携創造・支援部門	地域連携創造・支援事業費	18	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発	食物栄養学科 講師 金高 有里		●	●	●
		19	子育て講座「はらっぱ」の開催による地域へ向けての子育て支援事業	幼児教育学科 准教授 川喜田 昌代			●	●
		20	地域との連携活動を通じた地場野菜の有効活用	食物栄養学科 教授 小林 三智子	●	●	●	●
		21	「NPO法人 暮らしネット・えん えん食卓」食事サービス向上への取り組み	食物栄養学科 准教授 岡本節子	●	●	●	●
		22	ふるさとの緑と野火止用水を育むプロジェクト	児童教育学科 教授 星野 敦子	●	●	●	●
		23	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ー 健康にプラス！街づくりにプラス！ ー	文芸文化学科 准教授 星野 祐子	●	●	●	●

2 平成29年度実績報告

地域志向教育推進費 No.1	
研 究 課 題 名	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合
研 究 代 表 者	山本 悟(児童教育学科 教授)
共 同 研 究 者	日出間 均(児童教育学科 教授) 富山 哲也(児童教育学科 教授) 弘中 幸伸(新座市立新開小学校 校長) 塚田 昭一(新座市立野寺小学校 校長)
1. 概要 新座市公立小学校の教育現場では、団塊世代の教員退職及び新学習指導要領改訂期を迎え、校内研修活動の充実とその実践が喫緊の課題となっている。27年度は野寺小学校で算数科と体育科、28年度は野寺小で算数科と理科、新開小で国語科と体育科を対象に小学校現職教員研修システムの新たな方向性と教員養成カリキュラムの接点を模索してきた。29年度も野寺小と新開小を対象に現職研修システムの充実に向け、①新開小と野寺小の研修交流会実施、②現職研修システムと本学教員養成課程を連携する方策の明確化を目的にCOC事業を展開した。	
2. 活動内容 (1) 野寺小研修プログラム：算数科研究授業と協議会を3回(平成29年6月19日、10月17日、12月4日)、校外向け研究発表会(新座市教育委員会委嘱事業：平成30年2月9日)を1回行い、日出間教授が指導講評した。理科研究授業と協議会は1回(11月1日)実施し、塚田校長が指導講評した。学生の参加は合計19名である。 (2) 新開小研修プログラム：国語科研究授業と協議会を3回(平成29年5月29日、10月23日、11月13日)、校外向け研究発表会(新座市教育委員会委嘱事業：平成30年2月14日)を1回行い、富山教授が指導講評した。体育科研究授業と協議会は2回(11月7日、2月1日)実施し、山本教授が指導講評した。延べ32名の学生が参加。 (3) 教育講演会実施：野寺小、新開小の上記研究発表会にて、新学習指導要領に関わるテーマで講演会を実施した。 ● 野寺小講演会 講師「鳴川哲也先生・文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官」 ● 新開小講演会 講師「根津朋実先生・筑波大学准教授」 (4) 私的研究会への参加活動：野寺小では筑波大学附属小学校と提携して10名の教員が一日研修(授業参観)を実施。平成30年2月の学習公開・初等教育研修会にも4名が参加した。新開小では平成29年8月の第19回全国国語授業研究会と第2回夢の国語授業研究会、平成30年の2月学習公開・初等教育研修会に各1名が参加した。 (5) 野寺小と新開小連携研修会：双方の校外向け研究発表会に5名ずつの教員が参加し、研究会の運営を支援しつつ研究発表および研修システムの内容を確認する機会を設定した。 ※ 研究への参加人数：学生51人、教職員49人、行政機関等25人、地域団体等159人	
3. 成果 平成29年度も予算を柔軟に活用できる利点を十分に活用し、野寺小、新開小とも私的研究会等への研修参加、機材備品と研究図書の購入、外部講師を派遣依頼した教育研究会の実施等、充実した現職研修プログラムに加えた両校の研修を交流する活動も展開できた。特に、新座市教育委員会委嘱事業として校外向けに開催する研究発表会の内容を高めるため、本事業の現職教員研修システムを連携させ、野寺小では算数科、新開小では国語科をもとに研修システムの有効性を試行した。その結果、近隣の教育および行政機関を中心に2校で合計113名の参会者を得るとともに、参加した児童教育学科4年生29名の振り返りレポートから、発表内容が教職や授業力向上に役立つ意見を確認できたことは大きな成果といえる。本事業の進め方や方向性の妥当性が示唆されたと考える。 教員養成カリキュラムとの融合は、児童教育学科専門科目「教職実践演習(4年生必修科目)」の学習内容に本事業の研究授業等に参観する活動を定着させることができた。今後は3年生や2年生の授業科目との接点を探るつもりである。 本事業の現職教員研修システムの有効性を整理しつつ、次年度に向けて新座市教員委員会主催の3年次教員研修との連携を図り、現職教員研修と大学授業を関連づけた新たな仕組みを模索する予定である。 * 成果物：小学校現職教員における授業力向上プログラムの確立と教員養成課程プログラムの融合 ～ 報告書①野寺小、 報告書②新開小	



新開小：体育研究授業の様子



野寺小：教育講演会の様子

地域志向教育推進費 No.2	
研 究 課 題 名	地域密着型メディアによる情報発信
研 究 代 表 者	棚谷 祐一(メディアコミュニケーション学科 准教授)
共 同 研 究 者	好本 恵(文芸文化学科 教授) 石野 榮一(メディアコミュニケーション学科 教授) 加藤 亮介(メディアコミュニケーション学科 講師) 美和 さなえ(株式会社 クローバーメディア パーソナリティ)
1. 概要 「大学が発信する地域情報支援」をコンセプトに行うプロジェクト。本学十文字ラジオ研究部の活動をベースに番組制作を行い、志木市に拠点を置くコミュニティFM局「クローバーラジオ」のレギュラー番組として継続的に放送を行った。 内容的には学生の個人的な関心事や生活情報等が中心ではあるが、番組内で地域や大学のイベントを紹介するなど、地域密着型メディアであることを意識し、地域に視点をおいた番組づくりを心がけた。また、今年度は、従来の学内サークル学内のサークル「ライターデザイン同好会」との活動連携に加え、新座市のマスコットキャラクター「ゾウキリン」インスタグラムとの連携、地域イベントの紹介等、番組の質的向上に向けて努力をした。番組の運営にあたってはTwitter等のSNSを活用し、幅広いリスナーの獲得とインタラクティブな番組づくりを目指した。	
2. 活動内容 ①レギュラー番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」番組制作と放送 クローバーラジオにおいて番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」(毎週日曜日22：30～23：00)を放送。2015年7月5日(日)の第1回放送以来、現在までの年始の特別編成時を除きレギュラー番組として年間およそ52本のペースで毎週コンスタントに放送を行う。また、2015年10月9日より、放送局の好意によって無償の再放送枠が提供された(毎週金曜日深夜 1：30～2：00)。以来、本放送と再放送を併せて毎週2回の放送を継続的に行っている。 番組制作は毎週水曜日と金曜日の放課後(学期中)が充てられ、企画、取材、台本づくり、ナレーション、収録等のプロセスを学生が分担して行っている。番組は生放送ではなくPCの録音編集ソフト(Steinberg CubaseArtist8.5)を用いたハードディスクレコーディングによる収録形式であり、最終的な編集、納品は監修も兼ねて研究代表者の棚谷が担当している。エリア放送であるため、受信可能地域は朝霞市、新座市、志木市、和光市に限定されるが、スマートフォンの無料アプリ「リスラジ」等を利用することによってエリアに縛られない全国的な聴取が可能となっている。 ②活動連携 本年度は特に、地域に関する情報収集と拡散の効率化を目指し、昨年度に引き続き本学ライターデザイン同好会との連携強化を目指したが、実績として十分であったとは言えないので、本年度はより有機的な連携を深めていきたい。また、新たな取り組みとして、新座市のイメージキャラクター「ゾウキリン」のインスタグラムと連携し、ボイスメッセージの紹介を番組内のショートコーナーとして行った。 ※研究への参加人数：学生14人、教職員4人、行政機関等2人、地域団体等1人	
3. 成果 学生が主体となって企画、取材、運営、収録を行うことでメディアリテラシーの向上を図るというのが当初の目的であったが、番組を企画、制作する過程で個人的な関心事のみではなく地域の自然や文化、産業等についても学び、結果として地域への関心や愛着を深めていくことができた。また、地域や大学のイベントを紹介するなど、微力ではあるが地域の情報支援ツールとして役割の一端を担うことができたのではないかと感じている。 課題として、活動母体であるラジオ研究部の活動が、部員減少のため従来のペースでの継続が困難化したことがあげられる。そのため、現在、メディアコミュニケーション学科の自主ゼミである「メディア・ワークショップ」の活動としてあらたに「Radio CLIP」を立ち上げ、5月の放送より番組タイトルを「十文字プレゼンツ Campus☆Radio」と改称し、そのなかに「JUMONJI☆Campus Tea Party」(十文字ラジオ研究部)と「Radio CLIP」(メディアコミュニケーション学科)が交互に番組制作を行うという形態にシフトしている。 地域密着型メディアの一翼として、今後も地域活性化に貢献し、地域と大学を繋ぐメディアとして認められるよう、活動を充実させて行きたい。	

地域志向教育推進費 No.3	
研 究 課 題 名	新座市内の介護保険施設の利用者を対象とする傾聴ボランティア体験学習
研 究 代 表 者	大山 博幸(人間福祉学科 准教授)
共 同 研 究 者	富井 友子(人間福祉学科 講師)

1. 概要

社会福祉士指定科目における相談援助系の授業で、傾聴技術やコミュニケーション技術を学習した学生が、実際に福祉施設や事業所に訪問し、傾聴ボランティアを体験する。介護保険施設(特別養護老人ホーム)や障害者支援センターでの利用者を対象とした傾聴活動を学生に課し、その結果から、傾聴やコミュニケーション技術習得の方法やその成果について検討する。また、東日本大震災後に地域で活動した傾聴ボランティアの実態について調査する。

2. 活動内容

(1) 傾聴ボランティア活動と事前事後評価

- ①演習(大山ゼミ)内にて、3コマほど、傾聴技術を使用したトレーニングを実施。傾聴技術においては、態度・姿勢の非言語的側面、あいづち、最小限の励まし、感情のリフレクション、要約、フィードバックとしての感情伝達などを中心に意識してトレーニングした。
- ②平成29年11月8日新座市内特別養護老人ホーム「そらーれ新座」及び、12月6日にいざ生活支援センターにて、対象学生4名により1回60分を実施した。なお、ボランティア初日には施設職員よりボランティアにおけるガイダンスを受講。新座生活支援センターにおいては、当該センターが実施するSSTにも参加した。
- ③傾聴ボランティア活動実施前に傾聴技術に関する13の質問項目及び活動に対する自由記述によって構成された質問紙に、記名式にて、対象学生に対し、傾聴ボランティア活動事前及び活動実施後ごとに計3回記入を求めた。後日結果を集計、考察した。

(2) 岩手県陸前高田市で活動する傾聴ボランティア団体「こころのもり」代表西條氏及び、大槌町で活動する傾聴ボランティア団体こもびの会代表佐藤氏以下3名の方に、東日本大震災の被災者を対象とした傾聴活動の取り組みについてインタビューした。

※ 研究への参加人数：学生4人、教職員1人、地域団体等5人

3. 成果

(1) 傾聴技術に関するチェックリスト13項目の結果においては、4人の学生の内1名を除いて得点は上昇傾向にあった。また13項目の合計平均得点において、事後の平均得点が事前に比べ上昇しており、継続した傾聴ボランティア活動により学生の傾聴技術が向上したことが示唆された(図1)。項目別にみると「1. 相手に、一緒に考えようという姿勢を伝えることができる」「2. 相手の話を邪魔せずについていくことができる」「5. 相手が話したポイントを要約して言い返すことができる」の項目が他の項目に比べ比較的上昇した。自由記述においては、傾聴技術の一部を意識して用いられたこと、傾聴を通して徐々に利用者と関係が形成されていった経験などが記されていた。

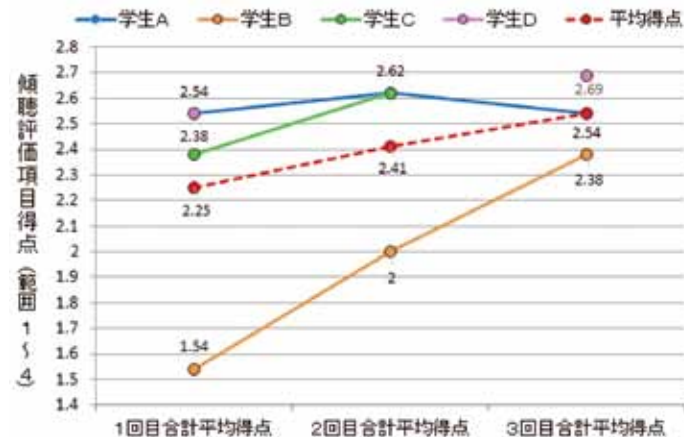


図1

実際の傾聴活動を通して臨床的スキルと位置づけられる傾聴の技術を参加した学生は習得できたことが示唆された。

(2) 岩手県内では行政の保健福祉部署における自殺予防の取り組みで、震災以前からも住民による傾聴ボランティア活動が展開されており、本調査の対象となった2団体も震災以前から活動を行っていた。特に「こころのもり」は、代表者の方も被災した当事者であり、震災後から被災者に対して傾聴ボランティア活動を実施していた。ボランティアは主婦層の女性が多く同時にボランティア自身も被災者であり、傾聴面談中、家族を失った悲しみを強い悲嘆の感情で語る対象者に、ボランティア自身の悲嘆経験が想起され強く動揺するといった2次トラウマ的な事態がしばしば起きてしまうことから、当該団体は、必ず2人で傾聴を行うこと、傾聴終了後は毎回必ず拠点に戻って個別の経過記録をつけ相互に共有・振り返りを行うこと、面接の専門家からの研修を積極的に行っていること、行政保健課との連携を重視しているとのことであった。

地域志向教育推進費 No.4	
研 究 課 題 名	地域志向科目での教材開発
研 究 代 表 者	石野 榮一(メディアコミュニケーション学科 教授)
共 同 研 究 者	安達 一寿(メディアコミュニケーション学科 教授)、狩野 浩二(児童教育学科 教授)、佐藤 陽(人間福祉学科 教授)、星野 敦子(児童教育学科 教授)、星野 祐子(文芸文化学科 准教授)、須田 健治(客員教授)、名塚 清(地域連携推進機構)

1. 概要

本学の地域連携活動の参考文献・資料としてオリジナルテキスト「いいね!にいざ2018年度版」を制作する。新座市内には市の行政広報、民間企業広報、各種団体広報が発行されているが、「若い世代に読んでもらうには」が共通した課題となっている。学生が市役所はじめ各団体の広報活動に関わることで地域の広報活動の課題を探り、地域の活性化に貢献する。

2. 取り組み

- 本学の地域連携活動を進めていくためのオリジナルテキスト「いいね!にいざ2018年度版」の制作に取り組んだ。「2017年度版」では本学COC事業が中間地点を経過したことから本学の地域連携活動全般をまとめ、掲載した。それらに加筆修正を加えるとともに、「より読みやすく、親しみやすく」するために、縦書きの構成を横書きに全面改訂した。また、表紙も刷新した。
- テキスト制作に学生をかかわらせるため、平成29年度後期「広報論」を利用。受講学生は2018特集として「新座市役所新庁舎」「ゾウキリンを使ったシティプロモーション」をテーマに取り上げ、事前学習、インタビュー、記事執筆など広報誌制作のノウハウを学んだ。

※ 研究への参加人数：学生20人、教職員7人、行政機関等10人、地域団体等5人

3. 成果

- 「いいね!にいざ2018年度版」は、本学の地域連携活動をまとめ、掲載した。さらに、縦書きから横書きに修正し、読みやすく、手に取りやすい体裁にした。2,500部制作し、18年度新入生全員と教職員に配布した。また、新座市内の各種団体に資料提供したほか、新座市が職員研修で補助資料に使用するなど評価も得た。さらに、地域連携協定を結ぶ新座市以外の近隣4市(朝霞、志木、和光、清瀬)及び東久留米市にも資料提供し、今後の取り組みが強化できるよう配慮した。
- 広報論では、新座市市政情報課の担当者、全国町村広報誌コンクールで最優秀賞の受賞歴がある三芳町の広報担当者を招き、実際の広報誌づくりを学ぶとともに、広報誌の役割を学んだ。
- 学生が特集のテーマである「新座市役所の新築」「Instagramとゾウキリンを利用したシティプロモーション」について資料収集、現地視察、関係者へのインタビューなどに取り組み、地域の現状や課題を学ぶ機会になった。
- 記事執筆、紙面レイアウト提案など広報誌制作の過程も体験できた。



「いいね!にいざ 2018」表紙



2018特集 ゾウキリンInstagram企画、新座市役所新庁舎

地域志向教育推進費 No.5	
研究課題名	地域志向教育実施のためのプログラム開発
研究代表者	安達 一寿(メディアコミュニケーション学科 教授)
共同研究者	地域教育開発部門員 宮野 周(幼児教育学科 准教授)、綾井 桜子(児童教育学科 准教授) 柏葉 修治(人間発達心理学科 教授)、宮城 道子(人間福祉学科 教授) 徳野 裕子(健康栄養学科 准教授)、和田 安代(食物栄養学科 講師) 星野 祐子(文芸文化学科 准教授)、込江 雅彦(生活情報学科 准教授) 加藤 亮介(メディアコミュニケーション学科 講師) 本間 修(総務部)、保岡 義明(教務課) 藤井 宏昌(就職支援課)、戸塚 勝美(教育情報推進課)、名塚 清(地域連携推進機構)

1. 概要

● 共通科目の地域志向科目「地域で学ぶ」「埼玉の地理・歴史・文化」の内容や方法の充実のため、ゲスト講師の招聘を行う。併せて、授業実施に必要な経費に関して申請を行う。

● 地域教育開発部門では、地域志向教育実施に向けての教育課程開発、教育内容・教育方法に関する取り組みを行っている。本取り組みでは、共通教育での地域志向科目の枠組検討、教材開発等、学科専門科目での地域志向科目の枠組検討、教材開発等、学生育成モデルと教育指標、評価ツールの開発と実施、学生成果測定に関する調査研究と実施を実施した。

2. 活動内容

● ゲスト講師の招聘

「埼玉の地理・歴史・文化」（共通科目／選択／前後期各1コマ）、及び「地域で学ぶ」（共通科目／選択／後期1コマ）でゲスト講師を招聘し、学生の地域の理解や社会貢献活動への参画を推進する。

● 学びのナビゲータの開発

学びのPDCAの実現のため、「入門ゼミナール」（共通科目／1年次必修）で利用する教材として、「学びのナビゲータ」と「学びのナビゲータ eポートフォリオ版」を開発する。

※ 研究への参加人数：教職員15人、行政機関等1人

3. 成果

科目名	招聘ゲスト講師数	履修者数
埼玉の地理・歴史・文化	23名(前期後期合わせて)	前期：63名、 後期：31名
地域で学ぶ	12名	90名



埼玉県環境検査協会 野口 裕司 氏



志木市議会議員(当時) 穂坂 泰 氏

「埼玉の地理・歴史・文化」でのゲスト講師による講義

地域志向教育推進費 No.6	
研 究 課 題 名	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築
研 究 代 表 者	権明 愛(幼児教育学科 講師)
共 同 研 究 者	齋藤 忍(児童教育学科・特別支援教育センター 准教授) 山田 陽子(幼児教育学科 教授)
1. 概要 日々、子どもと関わる現職保育者が障害児を含む気になる子どもを支援する地域の中核的な役割を担う存在として期待できるところに視点を当てた事業である。地域の保育所と幼稚園をそれぞれ1園ずつモデル園として設置し、発達相談支援活動を通して現場保育者の養成及び保護者支援を行った。併せて、大学教員が現場に出向いて現場保育者を対象に、現場保育者には大学に来て頂き在学生に講演を行い、相互の資源を活用しながら、現場保育者と在学中の保育者を目指す学生の障害のある子どもの支援に関する学びを深める取り組みを行った。	
2. 活動内容 ● モデル幼稚園では2名の発達相談を計26回、モデル保育園では1名の発達相談を1回実施した。 ● モデル幼稚園の現場保育者を対象に「発達に気になる子どものコミュニケーションの支援」をテーマにした講演を実施した。 ● モデル幼稚園と保育園、そして地域の療育施設の職員と大学の研究者が合同で外部講師を招いて「現職保育者と発達相談員が学ぶ合う場となる発達相談の在り方」をテーマに実践検討会を実施した。 ● 現場とのつながりの中での在学生の学びが深まった。 ① 保育者を目指す在学生を対象に「おもちゃで遊ぶことの面白さと楽しさ」をテーマにした現場保育者の講義を受けながら、おもちゃに触れ合うことで実践の視点から学びが深まった。 ② 障害児支援を目指す在学生が、モデル幼稚園における発達相談対象児を対象に療育を計9回実施し、在学生、現場保育者、保護者が一緒になって障害児の具体的な支援方法について学んだ。 ※ 研究への参加人数：学生57人、教職員5人、行政機関等2人、地域団体等12人	
3. 成果 ● モデル園における1年間の発達相談活動を通して、現職保育者の障害児保育につながる力量形成につながった。 ● 現場保育者を対象に発達障害児への理解と支援につながる研修会を開催することで、現職保育者の発達障害児に対する理解と支援の向上につながった。 ● 発達相談の在り方に関する実践検討会を実施することで発達相談の展開に関する意識が深まった。 ● 現場保育者と在学生の往還型の学びを通して、障害児支援の担い手である現場の保育者と障害児支援を目指す在学生の学びが深まったことが、本事業のもう一つの成果として挙げられる。 ● 本学の大学教員が保育現場に出向き、現職保育者を対象に講演を行い、また一緒になって実践検討会を行うことで、大学の資源を地域に還元することができた。  現場保育者を対象とした研修会  現場保育者を招いた授業  現場保育者との実践検討会  学生による発達相談対象児の療育	

地域志向教育推進費 No.7	
研 究 課 題 名	学生の自主活動による地域スポーツの活性化に関する実践プロジェクト ～社会貢献体験型オープンゼミナール2【のりさん塾継続版】～
研 究 代 表 者	石山 隆之(カレッジスポーツセンター 准教授)
共 同 研 究 者	佐々木 則夫(副学長)、安達 一寿(メディアコミュニケーション学科 教授) 山本 悟(児童教育学科 教授)、柳澤 貞夫(十文字スポーツクラブ 事務局長) 山形 友美恵(総務課)、肥沼 謙(カレッジスポーツセンター)、 柴山 桂(カレッジスポーツセンター)、佐々木 亮太(カレッジスポーツセンター)
1. 概要 昨年度より、佐々木則夫副学長が次世代人材育成担当として本学に就任し、昨年度行った社会貢献体験型オープンゼミナール(通称:のりさん塾)の継続、発展版である。女子サッカーを通じて世界で活躍してきた副学長は、現在、社会貢献の各種事業をライフワークとして推し進めている。その中から、本年度は少年少女育成事業を取り上げる。もう一つの柱として、一般社団法人十文字スポーツクラブや十文字学園主催の地域と連携したスポーツ活動ともリンクさせて学生が教室からフィールドへと活動の場を広げる取り組みも行っていく。本研究は、地域スポーツの活性化に関する実践プロジェクトの企画・準備段階から実施・振り返りまでを本学の学生が実際に体験できる機会を設けることにより、次世代を担う人材を育成することを目的とする。	
2. 活動内容 ①「特別養護老人ホーム 志木瑞穂の森 クリスマス会」2017年12月16日：十文字スポーツクラブと連携し、地域の老人ホームでクリスマス会を行った。FC十文字VENTUSの選手11名・スタッフ2名と十文字学園女子大学プラスちゃんくらぶの学生7名、星野祐子先生、佐々木則夫副学長が参加した。学生は企画・準備・運営に関わり、プラスちゃんネームプレートとクリスマスリースを作成し贈呈した。十文字の応援やプラスちゃんのダンスも披露し、老人ホームの方々とのふれあいは、学生にとって貴重な時間となった。 ②「幼稚園キャラバン なみきの幼稚園サッカー教室」2018年2月5日：FC十文字VENTUSの柴山監督と十文字学園女子大学サッカー部4名で、新座市なみきの幼稚園にてサッカー教室を行った。計150名の園児に参加して頂き、サッカーをしたことがない子どもたちとも楽しい時間を共有することができた。 ③「なでしこFutureカップ with なでしこひろば (第4回学長杯)」2018年3月17日・18日・21日：関東圏の社会人・大学・高校の8チームを招待し、サッカーフェスティバルを開催した。同時に新座市の女子小学生を招待してなでしこひろば(サッカー教室)を企画したが、雨天中止となった。大会とサッカー教室の企画・準備・運営に十文字学園女子大学サッカー部18名関わった。 ※ 研究への参加人数：学生31人、教職員7人、行政機関等4人、地域団体等10人	
3. 成果 参加者と学生が地域での活動を通して成長できる場を提供することができ、本学と地域自治体・団体との連携を深めることができた。また、学生が様々なボランティア活動や慈善事業に参加することで、学生自身がどのように成長するかを明確にし、学生の自主的・社会的活動・課外活動の参加を促進することができた。今後もサッカーをはじめとしたスポーツをツールとした少年少女育成事業・地域スポーツ連携事業が、地域に対してどのような寄与があるかを明確にし、本学学生が、地域を愛し、地域から愛される次世代の人材育成研究へと展開したい。	
      クリスマス会 幼稚園キャラバン 学長杯	

地域志向教育推進費 No.8	
研 究 課 題 名	中山間地域と都市部における人間形成力を活用した次世代地域づくり組織者を育成するカリキュラムの創造
研 究 代 表 者	狩野 浩二(児童教育学科 教授)
共 同 研 究 者	日出間 均(児童教育学科 教授) 星野 敦子(児童教育学科 教授) 久保田 葉子(人間福祉学科 講師)
1. 概要 本取り組みは、学生が中山間地域の地域づくりに関わる中で身につけた知恵や技などの属身的技術を都市部である埼玉県新座市において披露し、その成果を省察するとともに、今後の地域づくりのあり方について考察することを主眼としている。いわば、学生自身が中山間部と都市部とを往還する中で、相互の長所を学びつつ、将来は“中山間部と都市部とを融合させる組織者”となることをめざすものである。本学における学士課程教育との結合を意識しつつ展開し、将来にわたって持続可能な地域づくりを展開できる人材を育成するためのプランと教育課程を創造するものである。	
2. 活動内容 ①7月22日埼玉県比企郡小川町腰越地区腰上公会堂(以下“腰上公会堂”と略記)において、福島由博前区長他、地域住民と今年度の方針を検討する(学生5名参加)。 ②12月15日腰上公会堂において腰上元区長、田端太久實氏夫人、田端久子氏より、蕎麦打ち、うどん打ちを習う(学生5名参加)。 ③2月2日腰上公会堂で「生芋こんにゃくづくり」(学生5名参加)。腰上のみなさんから、ご指導をいただく。 ④2月3日ふるさと新座館においてチャリティー餅つき大会に参加、手作り蒟蒻田楽を頒布(学生5名参加)。売上金8,900円 ⑤3月2日新座市こぶし福祉基金への寄付(学生4名参加)。 ⑥絵本『新こんにゃくのひみつ』を発行(昨年度発行した『こんにゃくのひみつ』の改訂版)、埼玉県朝霞市、新座市、志木市、和光市、東京都東久留米市、清瀬市(連携6市66校)、小川町(6校)の各小学校及び、各教委(9教委)へ配付。 ※ 研究への参加人数：学生5人、教職員2人、地域団体等5人	
3. 成果 新座市においては、中山間地で作られている“生芋”による蒟蒻は、大変珍しいとのことであり、腰上産の蒟蒻芋による蒟蒻は、前日に腰上においてづくり、チャリティー餅つき大会において89食頒布した(単価100円)。用意した2kgの生芋から作った蒟蒻(89食分)は、1時間程度で完売した。学生たちは、並行して『新こんにゃくのひみつ』絵本を作成し、連携市の小学校に配付し、総合的な学習の時間等での活用をはかった。収益金は、全額一昨年度のものも併せ、三万円―新座市こぶし福祉基金への寄付にあてた。新年度はこれまでの成果を活かし、『総合科目』としてカリキュラム化し、全学の学生を対象としたプロジェクトとして試行する予定である。	
   新座市コブシ福祉基金への寄付 郷土の伝統に学ぶ チャリティーもちつき大会	

地域志向教育推進費 No.9	
研 究 課 題 名	子ども元気プロジェクト2017
研 究 代 表 者	鈴木 康弘(幼児教育学科 准教授)
共 同 研 究 者	宮野 周(幼児教育学科 准教授)、荻崎 伸一郎(幼児教育学科 講師) 川瀬 基寛(メディアコミュニケーション学科 准教授)、大山 博幸(人間福祉学科 准教授) 竹迫 久美子(十文字女子大学附属幼稚園 主任教諭)
1. 概要 少子高齢化や社会保障費の急速な増加に象徴されるように、今後の我が国の財政的基盤は脆弱であり、教育(子育て支援)への資源投入はますます難しくなることは自明である。我々は今までのシステム(行政主導、行政依存) から脱却し、パラダイムシフトを模索しなければならない時期に来ているといっても過言ではないであろう。 このような状況を鑑み、本研究では、パラダイムシフトのひとつの方向性として、子育てをキーワードとした豊かな社会システムのあり方を検討してきた(2015年度、2016年度プロジェクト)。本年度の目的は、これまでのプロジェクトで積み重ねてきた成果(多様な子育て支援プログラム)をさらに充実させ、まちづくりの役割を担うことのできる子育て支援システムへと発展させていくことにある。	
2. 活動内容 主に下記2つのプログラムを通して、まちづくりの役割を担うことのできる子育て支援システムのあり方について検討を行った。 ①『はって！けずって！おはながみマジック！』 立川文化芸術のまちづくり協議会主催「ワークショップ×ワークショップedu 2017」に参加し、学生立案による「お花紙を素材としたワークショップ」を実施した。ワークショップ後には他大学の学生スタッフや教員との交流会も行われた。学生自身がプロジェクトの立案・実践・振り返りという一連のプロセスを体験することによって、プログラムを実施する上で必要な事前準備のあり方や安全面への配慮などをお互いに協力しながら学び合う機会となった ②『ライオンズプロジェクト』(2017年8月～11月 合計7回実施) 地域自治体(新座市役所)や企業(西武ライオンズ)と協同することを通して、プロジェクトのさらなる広がりや深まりを目指すとともに、その課題について検討することを目的として実施した。ライオンズアカデミーコーチが感じている課題(打つ経験)についてその解決策を学生が考え、教材研究を行い、具体的な改善案を十文字学園女子大学として提案することを試みた。学生はライオンズアカデミーへの提案について考え、教材研究を行った過程および元プロ野球選手と共に子どもへの指導に関わった経験を通して、「投げる動き」や「打つ動き」を子どもがどのように経験できるのかについて、その可能性を実践的に学ぶ貴重な機会となった。 ※ 研究への参加人数：学生42人、教職員6人、行政機関等2人、地域団体等2人	
3. 成果 両プロジェクトを通して、学生は、様々な年齢の子どもへの指導、親子の関わりを観察、社会で活躍する人材との交流等を経験し、様々な気づきを得るとともに、プロジェクト運営の困難さやその有効性について深く考える機会となった。 大学の知的資源(教員の専門性)の地域の子どもの育ちへ還元(社会貢献)と学生の深い実践的学習機会の両立について多様なノウハウを蓄積することができたことは、保育者養成におけるディープアクティブラーニングを考える上での貴重な資料となり、本研究の大きな成果の一つであった(日本保育学会第71回大会、日本発達発達学会第16回大会で発表)。一方で、プロジェクトの広がりや深まりを保証しようとすれば、それは日常的に子どもと関わる機会の多い保育者や保護者との連携が重要なポイントとなる事を改めて確認することとなった。保育者や保護者、また地域住民が子どもと関わるチャンネルを豊かにする内容を含めたプロジェクトの展開について検討していくことが今後の課題である。	
 おはながみマジック!の様子  ライオンズプロジェクトの様子  ライオンズプロジェクト参加者集合写真	

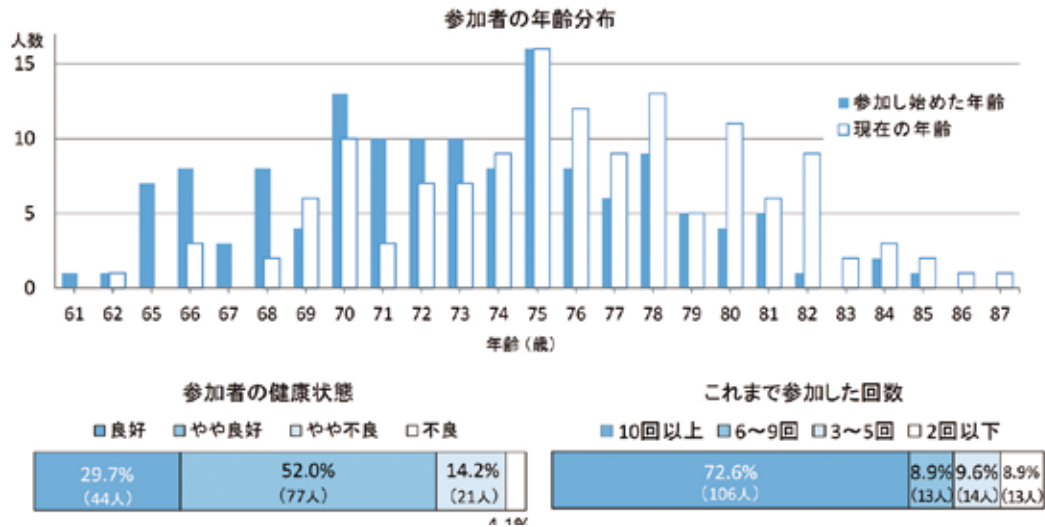
地域志向教育推進費 No.10	
研 究 課 題 名	親子支援プロジェクト
研 究 代 表 者	山口 由美(人間福祉学科 准教授)
共 同 研 究 者	伊藤 陽一(人間福祉学科 准教授) 小笠原 順子、金子 里佳、塩沢 夕起子、平光 里恵(志木市いろは子育て支援センター) 山下 美香、小西 恵子(志木市西原子育て支援センター) 畠中 由美子、北澤 恭子、橘 郁子、小林 美里(NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪)
1. 概要 平成27年度よりCOC事業において、親子支援を行っている。平成28年度は、住民に身近な場所である子育て支援センターに気軽に父親に来ていただけるように、KAPLAブロックを用い、継続的に父親が子育てに参加できるように遊び支援をした。子育て支援センターを利用している父親は、子育てに積極的な様子がうかがえる一方で、子育て支援センターにおいて、母親たちのように父親同士で話す様子はあまり見られなかった。それらの様子から、父親たちへの子育て支援に関するニーズを知る必要があると感じ、平成29年度は、新米パパたちが子育てを楽しみながら語り合える場としての「お父さん講座」の開催と、「KAPLAブロックを用いた遊び支援」の継続を通して、父親の子育て支援に関するニーズを知ることを目的として研究を進めた。	
2. 活動内容 活動内容としては、新米パパたちが子育てを楽しみながら語り合える場としての「お父さん講座」を開催すること、「KAPLAブロックを用いた遊び支援」を継続することとした。 ①お父さん講座の開催(自身も“子育て”経験のある人間福祉学科 伊藤陽一准教授が担当する) お父さん講座の第1回目は、平成29年9月30日(土)、第2回目は、平成30年1月20日(土)、共に志木市市民会館で行った。テーマは、第1回目は「子どもとの関わり貯蓄」、第2回目は「これからの発達と関わり～しつづけて必要?!～」とした。お父さんが初めてのお子さんと関わるうえで、疑問や不安を少しでも軽減できるアドバイスを行った。また、お母さんとの子どもの関わりについて積極的にお父さんも参加し、お母さんを気遣う視点や方法もアドバイスした。2回とも、参加者は少なかったが、深くお話ができ、濃い内容となった。 ②KAPLAブロックを用いた遊び支援を継続する。 学生たちの中には以前、KAPLAブロックを用いた遊び支援を行った学生もあり、子どもたちを想像しながら、どのような遊びができるだろうかなどを考えて行動していた。前年から引き続き遊び支援を行ったため、親子で楽しみにしているなどといった声もいただいた。学生たちは、子どもと関わる中で、子どもたちの発達に関する理解を深め、適切なかかわりを考えていけるようになった。 ※ 研究への参加人数：学生7人、教職員2人、地域団体等3人	
3. 成果 平成27年度から講座をはじめて、地域の親子と私たちが顔見知りの関係になってきた。学生たちは、今まで関わる事がなかった未就園児やその父母たちの関わりを通していろいろなことを感じる事ができた。平成29年度のお父さん講座の1回目は「にここお父さん講座」としていたが、お父さんたちからは、講座名と内容が一致していないという意見をいただいた。2回目は「パパの会」(仮称)ということで、周知した。ちらしにはお母さんへの対応について明記していたものの、周知の方法などに課題があることが分かった。 子育て支援センターを利用し、講座に出ようとする父親たちは、子育てに参加しようという意識が高い人が多い。子育てに大変さを感じている父親への支援も必要であるが、接点に乏しい。今後も地域の子育て支援センターや講座等で親子を支援する体制があることを周知し、子育て支援を継続することが重要である。	
 お父さん講座  KAPLAブロックを用いた遊び支援	

地域課題解決型研究推進費 No.11	
研 究 課 題 名	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
研 究 代 表 者	久保田 葉子(人間福祉学科 講師)
共 同 研 究 者	狩野 浩二(児童教育学科 教授) 棚谷 祐一(メディアコミュニケーション学科 准教授) 野口 志都代(広報課)、久保 裕子(学生支援課) 新座市教育総務部生涯学習スポーツ課、ふるさと新座館
1. 概要 ふるさと新座館ホールのスタインウェイ・ピアノの活用促進と、地域の公共ホール活性化を目的として、新座市教育委員会との共催（後援：新座市、新座市文化協会）で、「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」を開催した（出演はマリンバ奏者吉岡理菜、本学人間福祉学科の学生8名、久保田葉子）。公演に向けて新座の歴史や自然をテーマにした朗読詩を横須賀薫前学長が本学学生のために書き下ろし、久保田が作曲を手掛け、同コンサートで人間福祉学科の学生により初演を行った。創作のための取材にあたり、星野敦子教授と「ふるさとの緑と野火止用水を育む会（HUGネット）」の協力を得た。地域に根ざした作品の創作・表現活動により、学生が総合的に地域を学び表現する機会となり、地域の方にその成果を発信することができた。	
2. 活動内容	
春	オリジナル朗読作品の作詩、作曲 プログラムの構成とリハーサル開始
7月	チラシ・ポスターの作成（デザイン担当：メディアコミュニケーション学科3年 白石絢） HP等で公演情報の告知及びチラシ配布・ポスター掲示
8月	葉書・メールによる申込受付開始。当日配布の印刷物の作成
10月	「ふるさとにいざ✦オータムコンサート」開催 出演：人間福祉学科1年5名（久保千紘、桑林明美、関彩花、関川綾、高橋奈々）、 同学科2年3名（赤羽愛美、川口彩乃、小泉優花）、受付誘導：同学科3年2名（鎌倉愛、仲島成美）、録音撮影：メディアコミュニケーション学科4年（吉垣育美）
10月～11月	アンケートの集計、記録映像・写真の整理、企画の振り返り
12月～1月	朗読詩「野火止の水と緑と」改訂版の創作、浄書譜の作成 「地域連携フォーラム」に向けたリハーサル開始
2月	「地域連携フォーラム」で朗読詩「野火止の水と緑と」改訂版を初演 出演：児童教育学科1年5名（高橋末紀、田村沙也香、豊田彩七、中江美菜、矢澤真友）
※ 研究への参加人数：学生17人、教職員13人、行政機関等5人、地域団体等10人	
3. 成果 コンサートは3年目の開催となり、来場者数が毎年増加しており、今回は206名となった。マリンバとピアノによるクラシック音楽と、人間福祉学科の学生による手話ソングに加え、大学の教職員と学生が力を合わせて地域に根差したオリジナル朗読作品「野火止の水と緑と」を創作し、発表することができた。2018年1月には朗読詩（改訂版）浄書譜の整備、2月には、朗読詩の改訂版初演を児童教育学科1年生が行い、身体表現を加えた総合表現の作品として発展させた。朗読詩の楽譜は本学図書館に置き、関心のある方にも見て頂くことができた。今後また地域で発表の機会があれば楽譜と共に地域に還元し、教職を目指す学生の表現力・教育力向上のための教材として活用していく。	
 生の演奏に触れるひととき	
 学生たちがステージで手話を指導	
 朗読詩「野火止の水と緑と」を披露	

地域課題解決型研究推進費 No.12	
研 究 課 題 名	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
研 究 代 表 者	上垣内 伸子（幼児教育学科 教授）
共 同 研 究 者	金勝 裕子（幼児教育学科 教授）、向井 美穂（同学科 教授）、山田 陽子（同学科 教授）、鈴木 晴子（同学科 講師）、横井 紘子（同学科 講師）、渡邊 孝枝（同学科 助教）、加藤 陽子（人間発達心理学科 准教授）、中谷 えりか（十文字女子大附属幼稚園 教諭）、近藤 有紀子（教職支援課）、松野 さおり（同課） 協力者（プラスママ）：近隣在住の幼児教育学科02年度入学の卒業生2名（池田 愛加・辻 あゆみ） 03年度入学の卒業生4名（上妻 祥子・荒井 友美・古島 繭子・山口 美弥） 06年度入学の卒業生1名（西村 由里子） 計7名
1. 概要 乳幼児を持つ親の育児不安傾向や育児力そのものの、弱体化が指摘されて久しい。乳幼児の発達や世話の知識・技能の乏しさにより、乳幼児と遊ぶことを楽しんだり子育てに喜びを感じるという経験が、家庭で親子が向き合うだけの生活の中では得られにくいという現実がある。そのような孤立しがちな親子にとって、高い保育実践力（子どもと遊び子育てを楽しむ力）を持った子育て仲間との交流は、子育てを楽しみ育児力の獲得につながる意義ある体験となる。そこで、幼児教育学科卒業生のうち、現在家庭で子育て中の保育経験者が、幼稚園教諭や保育士としてこれまで培ってきた保育実践力を活かして行う、新座市とその近隣に住む乳幼児とその親の子育ち・子育て支援事業を継続的に開催した。大学が卒業生のキャリアを活用し、さらにそのエンバワメントを支えつつ、地域の子育てに貢献する子育て支援事業であり、学生の子育て支援活動の実践と指導を行う場としての機能も持つ。平成29年度は、継続参加者の中の気になる親子（特に母親）に対する支援についても検討を試みた。	
2. 活動内容 ① ピア・サポート形式の子育て支援事業結果の分析と課題の整理。キャンパスのもつ子育て支援のインフラとしての特性の活用、子ども同士の関係構築、子育てのリスク支援、学生の参加とOJTとしての有効性について検討 ② 新座市子育て支援課・市内子育て関連施設・附属幼稚園と連携した広報、広報課・同窓会協力のウェブ発信 ③ 「プラスママの子育てサロン」の計画立案と継続的開催と終了後のカンファレンス(6月～3月まで12回開催) ● プラスママ(子育て支援に携わる卒業生) 8名(幼児教育学科02生、03生、06生) ● 参加者延べ数：保護者256名、子ども276名(0～4歳児)、スタッフ69名、スタッフの子ども74名、学生75名 ④ 子育てのインフォーマルな相談とアドバイス(教員)、スタッフによる親子関係構築支援 ⑤ 学生の保育参加と絵本、ペープサート、手遊びの機会提供、OJTによる関わりと環境構成への助言指導	
3. 成果 継続開催も4年目となり、新座市内での知名度の高まりと参加者の定着、同窓会の広報効果による卒業生親子の参加など、卒業生支援の役割も果たし、地域の子育てへの貢献も見え始めた。参加親子数（256組）も参加学生数も前年平成28年度の約1.7倍に増加した。毎回の参加親子組数の平均は21組。1年間のサロン参加者は783名。本学の子育てインフラとしては、思い切り体を動かして遊べる広いキャンパスの自然が何よりも親子にとっての魅力となっていることがわかった。同様に、学生たちの温かく好意的な態度も教育福祉等の対人専門職養成中心の本学の特性であり、子育てにやさしい女子大学であると認識された。保育経験者である卒業生の子どもの保育および親への保育指導の専門性が、今年度は子育てスキルの乏しい母親に対する子育てのモデル機能としても発揮された。学生の保育／子育て支援の実践力が、スタッフの指導を受けて伸びていくことも確認できた。	
 2017.6.23 食事風景	
 2017.9.8 水遊び	
 2017.11.7 学生スタッフも絵本の読み聞かせに参加	
 2018.2.7サブアリーナで身体表現遊び	

地域課題解決型研究推進費 No.13	
研 究 課 題 名	生活習慣病などの疾病と食事・運動との関連についての検討
研 究 代 表 者	松本 晃裕(食物栄養学科 教授)
共 同 研 究 者	岡本 節子(食物栄養学科 准教授) 和田 安代(食物栄養学科 講師) 福田 平(国際栄養食文化健康研究所 非常勤研究員、神奈川県立保健福祉大学 准教授) 目黒 美葉(国際栄養食文化健康研究所 非常勤研究員)
1. 概要 高齢化社会を迎え、高齢者人口が急激に増加してきたが、糖尿病、高血圧症、脂質異常症、心疾患などの生活習慣病の患者が増加して来ており、また十分に体を動かせなくなるというサルコペニア患者も増加してきているという問題が生じてきた。 本年度は、 ①糖尿病患者の食事調査、運動習慣調査、サルコペニアの有無、体組成、血糖などの測定を行い、糖尿病患者ではサルコペニアが多いのか、またその原因について食習慣と運動習慣を中心として研究を行った。 ②心臓リハビリテーション患者において、全身持久力の指標である最大酸素摂取量、心機能の指標である運動時の心拍出力・1回拍出力、食事調査、運動習慣調査、サルコペニアの有無、体組成、血糖、血中脂質などの測定を行い、心疾患と食習慣・運動習慣・サルコペニア・全身持久力・心機能との関連や、心臓リハビリテーションがサルコペニアを予防できるかなどの研究を行った。	
2. 活動内容 研究① ●対象：通院中及び入院中の成人糖尿病患者約50名を目標として、2年間の研究を開始し、うち約10名の検討をした。本研究は本学の大学院生でもある武蔵野赤十字病院栄養科の原純也氏(管理栄養士)の修士論文にもする予定であるが、同病院の糖尿病代謝内科の医師との共同研究として行った。 ●測定項目：食事調査、運動習慣の調査、血液検査(血糖、HbA1c、血中ビタミンDなど)、インピーダンス法による体重・筋肉量・体脂肪量、身長、BMI、握力など。 研究② ●対象：通院中および入院中の心疾患患者約50名を目標とし、平成29～31年度で行う予定である。獨協医科大学病院ハートセンター 中島敏明教授のチームと連携して行っていく。 ●測定項目：食事調査、運動習慣の調査、全身持久力の指標である最大酸素摂取量の測定、心機能の指標である運動時の心拍出力・1回拍出力、血液検査、インピーダンス法による体重・筋肉量・体脂肪量、身長、BMIなど。 ※ 研究への参加人数：学生1人、教職員2人	
3. 成果 研究① HbA1c高値群においては、骨格筋量、筋力が低下している可能性があり、糖尿病とサルコペニアの関連性が明らかになることで、今度の栄養食事指導や療養支援においての介入方法が確立できることが期待できる。 研究② 心臓リハビリテーションを行なっている心疾患患者を対象として、研究を行う計画作成、倫理委員会への提出の準備などの作業を行った。平成30年度の5月頃より研究を開始する予定である。 本研究の結果より、糖尿病や心疾患患者の食習慣・運動習慣などが明らかとなり、それらの患者が有している食事や運動についての現状の問題点が明らかとなると考えられる。近年、糖尿病患者や心疾患患者が増えているが、こうした患者の食事内容・運動習慣のデータが明らかとなると、家庭での食事をどのように改善して行くべきか、また病院や高齢者施設などにおいて管理栄養士などがどのように対応すれば良いかについての有用な資料になると考えられる。本学が所在する新座市や埼玉県の病院・高齢者施設での食事の対応にも十分活用できる有用な知見が得られると期待される。 また地域社会では、住民の運動習慣を増やす種々の施策をしている市町村も多いが、どのようにそれを行っていくべきかの重要な知見が得られると思われる。	

地域課題解決型研究推進費 No.14	
研 究 課 題 名	新座市の健康長寿に向けた取り組みとその評価に関する地域連携研究
研 究 代 表 者	加藤 則子(幼児教育学科 教授)
共 同 研 究 者	志村 二三夫(学長)、長澤 伸江(食物栄養学科 教授)、井上 久美子(食物栄養学科 准教授)、布施 晴美(人間発達心理学科 教授)、富井 友子(人間福祉学科 講師)、名塚 清(地域連携推進機構)、横山 徹爾(国立保健医療科学院生涯健康研究部 部長)、藤田 誠一(健やか食育エコワーク 代表)
1. 概要 新座市において高齢化が進む中で、生活習慣病やそれに伴っておこる寝たきりや認知症等の要介護状態の人の増加が社会問題となっている。個人の健康づくりを地域社会全体で支え、多様な地域活動との連携によって健康づくりを推進し健康長寿を目指したまちづくりを推進する必要がある。健康日本21(第2次)を背景に、新座市では第2次いきいき新座21プランが策定され、食育推進をはじめとした各種行動計画に落とし込まれ、様々な取り組みが精力的に展開されている。新座市における健康づくり活動の科学的評価を行う事により、より効果的な取り組みにつなげてゆくことを目的とする。	
2. 活動内容 2017年6月新座市健康福祉関連4課の課長副課長に集まっていただき、ニードを吸い上げた。介護保険課から、介護予防・生活習慣病予防・健康増進のための地域の健康づくりを目指した健康のまちにいき推進事業「にいき元気アップ広場」の事業評価の要望があった。同事業は開始より4年目を迎え、年間延べ参加者数も8千を超える広がりとなっている。対象は65歳以上で健康増進に関心のある市民。調査計画に先立ち、新座市介護保険課より事業への参加状況のリストの情報提供を受けた。質問紙の作成に当たっては、医中誌1987年以降で「健康づくり事業×評価」で検索し、290件ヒットしたうち要旨から判断して21件の本文に当たった。その中で3件の文献の内容を参考に質問紙を作成した。新座市いきいき健康部に協力を依頼し、「にいき元気アップ広場」参加者に質問紙を手渡してもらった。同じ人に二度以上手渡すことが起こる可能性を50%、回収率50%とした場合、500件の回答を得る場合には、2000人に配布する必要があることが見込まれた。会場でこの調査の質問紙を手渡し、自宅で回答し、返信用封筒を用いて郵送によって返送してもらった。回答に要する時間は10分程度である。平成30年3月に質問紙の手渡しを開始した。3月には各集会場を中心として計25か所で事業が実施された。学生2名は調査票作成に関して内容の整理やレイアウトに関わった。また、袋詰めやパンチ入力等に関して業者への発送作業に関わった。 ※ 研究への参加人数：学生2人、教職員8人、行政機関等5人、地域団体等1人	
3. 成果 3月に実施された事業への参加者149名から回答が得られた。うち女性が128名(86.5%)、年齢は75.9±5.3(平均±標準偏差)歳であった。現在の健康状態を良好としたものが44名(29.7%)、やや良好としたものが77名(52.0%)で合わせると8割を超えた。参加の目的として、85.2%のものが運動不足解消を挙げた。これまで利用した回数は106名(72.6%)が10回以上だった。参加によって新たに生活習慣で取り組むようになったものが71.8%、検査値の改善があったものが36.6%、参加することで気持ちが前向きになったものが47.6%であった。ワンポイントアドバイスでは、骨密度、感染予防、脳トレに6割以上が参加していた。事業への要望では、回数をより多くしてほしいというのが、極めて多かった。これらの結果を市に還元して、より効果的な事業展開に活用していただくとともに、学生に結果を考察させることにより、分析的思考力の向上をめざす。	



地域課題解決型研究推進費 No.15

研究課題名	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み
研究代表者	布施 晴美(人間発達心理学科 教授)
共同研究者	風間 文明(人間発達心理学科 教授)、加藤 陽子(人間発達心理学科 准教授)、 平田 智秋(人間発達心理学科 准教授)、安田 哲也(元人間発達心理学科 助手)、 長田 瑞恵(幼児教育学科 教授)、倉方 博章(新座市社会福祉協議会 総務課管理係長)、 新座市こども未来部保育課

1. 概要

平成27年度に放課後児童クラブ運営指針が策定され、放課後児童支援員認定資格研修も始まるなど、放課後児童クラブ(以下、学童保育)の大きな変革期を迎えた。そこで、国が目指す施策を理解し、学童保育支援員との連携や大学の貢献策の手がかりを得るために、①学童保育の大規模化・狭隘化の課題に対して大学施設を利用した児童対象の体験型イベントの企画実施、②学童保育支援員の専門性や質の向上を目指すための研修会の開催、③学童保育支援員の職務に対する使命感やストレス等に関する調査の実施、などに取り組んだ。これらの活動を通して、新座市の放課後児童クラブの児童・学童保育支援員を支援するための具体的な方策の検討を進めている。

2. 活動内容

①児童の体験型イベント(凧作り凧揚げ)(H29年12月27日)の開催

児童が自ら作成し、達成感が得られる体験型イベントとして「凧作り凧揚げ」を提案した。今年は新座市放課後児童保育室への公募により、新開放課後児童保育室の児童60名が参加した。学生にはイベント開催に向けて凧作りの材料作成と凧作り凧揚げの体験をしてもらい、当日児童を指導できるように準備した。

②学童保育支援員対象の事例検討会(H29年9月12日)・研修会(H30年2月19日)の開催

事例検討会は約30名が参加し、グループごとに事例をだし対応を協議すると共にスーパーバイザーから助言を得た。研修会は新座市放課後児童保育室職員全員を対象とし、事前打ち合わせによるニーズから「子どもの発達と気になる子ども」、「対人関係と集団遊戯」、「子どもの健康管理」の3テーマを取り上げる分科会を設け、学びの機会を提供した。参加者は100名を超えた。分科会講師は、本事業の教員および外部講師が担当した。

③新座市を含む3市の学童保育指導員対象質問紙調査(H29年3～5月に実施)の結果の解析

調査は115名(回収率49.6%)から回答を得た。児童指導員は、日常の仕事の中で困難さやストレスを感じながら、子どもの健全な成長を支える仕事に使命感を持ち、学ぶことによって少しでも困難さを解決につなげていこうとする想いを抱いていることが明らかになった。一方でバーンアウトの可能性もあり、児童指導員に対する支援的な関わりも重要であるという結果も見出された。

※ 研究への参加人数：学生23人、教職員6人、行政機関等3人、地域団体等 約140人、児童60人

3. 成果

①児童の体験型イベント(凧作り凧揚げ)(H29年12月27日)の開催

：本学学生との協働により、凧作り凧揚げの指導と怪我等の予防ができ、参加した児童の充実感・満足感を高めることができた。また、学童保育室から本学までの往復の歩行移動における事故防止支援も実施できた。今後も学生と企画していく。

②学童保育指導員対象の事例検討会(H29年9月12日)・研修会(H30年2月19日)の開催

：研修会については、開催日時を学童保育の勤務時間内に設定するというコラボレーションが実現し、多くの職員の参加が可能となった。研修会は好評であり、来年度もこうした全職員対象の研修会の開催の要望があり、続けていく予定である。

③新座市を含む3市の学童保育指導員対象質問紙調査(H29年3月～5月に実施)の結果の解析

：調査結果について、平成29年度本学紀要(第48集2号)に研究ノートとして掲載が決定している。







学生集合写真

凧揚げの様子1

凧揚げの様子2

地域課題解決型研究推進費 No.16	
研 究 課 題 名	親の主体的な子育てを可能とする地域支援の在り方の検討
研 究 代 表 者	向井 美穂(幼児教育学科 教授)
共 同 研 究 者	上垣内 伸子(幼児教育学科 教授)、名塚 清(地域連携推進機構) 渡辺 潤子(新座市こども未来部 こども支援課 こども政策係長) 田村 佳美(新座市こども未来部 こども支援課 主事)
1. 概要 平成26・27年度十文字学園女子大学COC事業地域志向教育研究「子育て・子育て支援におけるリスク支援の在り方の検討～先駆的取り組みをしている団体との情報交流～」の一環として、地域で必要とされる子育て支援の在り方について検討してきた。また、平成28～30年度科研費基盤研究(C) 16K00763「親の主体性を育む子育て支援：「対話と傾聴」を基本とするネウボラナースからの示唆」において、「子育てしやすい国」としても知られているフィンランドのネウボラの実践に着目し、妊娠期から学童期に至る切れ目のない支援、地域資源の活用と連携による子育て支援が、親の子育てに対する主体的な取り組み意識と姿勢を育てていることを確認してきている。そこで、今回は、平成28～30年度科研費基盤研究(C)の一環として、これまで健診場面の陪席観察が続けている研究協力者のフィンランド、ウロヤルヴィ市のネウボラナースを招聘し、ネウボラにおける「対話と傾聴」を基本とした支援について、国際シンポジウムを企画した。その国際シンポジウムを市民講座の一つとして位置づけることにより、新座市及びその近隣にて生活する市民に「子育て・子育てとは何か」を考える端緒とし、地域で親が主体的に子育てする事ができる為に必要なことを、様々な立場で考える理解を深めることを目指す。また、新座市の子育て支援職に従事している方々への研修会等を行う事で、親の主体的子育てを支えるために必要とされることについて考える機会を設けることとする。	
2. 活動内容 ①国際シンポジウムの企画及び開催 ●「子育て・子育てを支えるネウボラナースからのメッセージ」9月9日(土) 新座市ふるさと新座館ホール ●公開研究会(ワーク・ショップ) 9月10日(日) 10：00～12：30 十文字学園女子大学巣鴨キャンパス *平成28～30年度科研費基盤研究(C) 16K00763「親の主体性を育む子育て支援：「対話と傾聴」を基本とするネウボラナースからの示唆」を基に企画し、新座市との共催という事で開催された。また、フィンランド大使館及び日本保育学会の後援も得られた。準備及び当日は新座市職員の方々と本学学生スタッフが協力しながら進行了。 ②新座市の子育て支援者への研修(10月17日 新座市役所) ③新座市の子育て支援施設における保護者への講演(12月15日 新座市子育て支援センター つばみ) ※ 研究への参加人数：学生延30人、教職員3人、行政機関等4人、地域団体等12人	
3. 成果 各活動及び実践を通して、①子育て・子育て支援への社会的関心を高める：意識の熟成、②地域でできる事・自分自身ができる事を考える動機づけ、③子育て支援実践者へのエンパワメントの3点において成果が得られた。また、国際シンポジウムの開催において、スタッフとして参加した学生にとっては地域とつながる実践的学びの場となった。新座市職員の方々と協力することを通して、社会で働く上で必要とされることの学びへとつながっていった。	
	
ネウボラ国際シンポジウム	ネウボラチラシ

地域課題解決型研究推進費 No.17	
研 究 課 題 名	サトイモの親芋活用プロジェクト
研 究 代 表 者	高橋 京子(健康栄養学科 教授)
共 同 研 究 者	木村 靖子(健康栄養学科 教授) 佐々木 菜穂(健康栄養学科 講師) 宮川 保之(児童教育学科 教授)
1. 概要 埼玉県は、全国有数のサトイモの生産県である。サトイモは東南アジア原産のサトイモ科の植物であり、主に地下茎が肥大した塊茎を食用とする。一般に市販されているサトイモは土垂や石川早生などの子芋と孫芋であり、これらの親芋は収穫の際に大量に廃棄される。新座市内では、親芋を使った焼酎などの開発も手掛けられてはいるが、親芋のほとんどは廃棄されている状態である。そこで、この親芋の有効活用に向け、地域の山崎ファームに親芋を提供いただき、親芋の有効な成分を生かした新座市の特産となる食品を開発し、地域貢献を果たすことを考えてきた。 昨年度、本研究費によりサトイモの親芋と孫芋の成分比較を行った。その結果、親芋においてえぐ味の成分として知られるシュウ酸の含量が高いことが明らかになった。これをふまえ、本研究ではサトイモ親芋の下調理方法の違いによるシュウ酸含量の変化を調べ、よりおいしい調理方法の検討を行った。	
2. 活動内容 埼玉県新座市の農家よりサトイモ親芋を入手し、シュウ酸含量を低減させる下処理方法を検討した。 ① 下処理方法の予備検討 サトイモ親芋はさいの目切りまたは薄切りにし、生、水にさらす、ゆでる、揚げるなどのそれぞれの下調理時間を検討した。 ② 下処理方法の違いによるシュウ酸含量の変化 1.5cm角のさいの目切りにしたサトイモ親芋について、生、水にさらす、ゆでる、揚げるなどの下調理を行い、シュウ酸含有量の変化を調べた。シュウ酸含有量の測定は(一財)日本食品分析センターに依頼した。その結果、10分間水にさらした親芋は、シュウ酸含有量が大きく減少することが明らかになった。 ③ これらの結果を踏まえ、サトイモ親芋レシピ考案および試作を進めている。 ※ 研究への参加人数：学生9人、教職員6人、地域団体等1人	
3. 成果 これまでの研究により、サトイモの親芋は、孫芋よりもシュウ酸含有量が著しく高いことが明らかになった。シュウ酸はえぐ味の成分である。シュウ酸は通常の摂取量であれば体内のカルシウムと結合して、便に混じって体外に排出されるが、過剰な摂取で余ったシュウ酸は尿に入り込み、尿のカルシウムが結びついて「結石」を作ると言われている。親芋を食用として利用するためには、シュウ酸を減少させる調理方法の検討が必要である。 本研究の結果、下調理方法により親芋のシュウ酸含有量が減少することが明らかになり、親芋の有効利用に向けた調理方法の検討における基礎的なデータが得られた。 本研究で得られた成果は第65回日本栄養改善学会学術総会(2018年9月3日～9月5日、新潟)において発表予定である。 また、これまで、サトイモ親芋の調理の試作などに学生を参加させてきたが、本年度は、成分分析にも学生を参加させた。学生は実際にデータを見ることで、親芋と孫芋の成分の違い、下処理の方法によるシュウ酸の違いに興味を持ち、サトイモ親芋レシピ検討にも積極的に参加している。	

地域連携創造・支援事業費 No.18	
研究課題名	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
研究代表者	金高 有里（食物栄養学科 講師）
共同研究者	名倉 秀子（食物栄養学科 教授） 岡本 節子（食物栄養学科 准教授） 工藤 貴子（食物栄養学科 助手）

1. 概要

A

- 実学教育の一環として、食物栄養学科の学生ができるだけ早期に社会との関わりを持ち、即戦力を養うことで、将来の管理栄養士としての活躍の可能性を広げるため、新座市周辺の地域に密着した企業/店舗/住民との共同事業により、地域の食材を用いた商品開発・イベントの企画を行う。
- 地域の食材を扱い、学生が埼玉の食文化や食材の栄養学・調理学的な観点からも食材について学びを深める。さらに、地域の住民へ浸透可能な戦略について学ぶ。地域に住む消費者からの意見や企業側にたった観点を学び、振り返りを行う。

B

- 地域の保育園において、園児と調理実習を行う中で、地域との結びつきや保育園の現場を実学として学ぶ。

2. 活動内容

A-1 企業・教員・学生による取り組み

学生と教員との意見交換を行ったうえで、教員と企業との意見交換を行い、この取組みのコンセプトやお互いにとつての意義を確認した。企業、学生、教員との意見交換(食材・内容の決定)を行った。内容は、地域の親子を対象とした、絵本の読み聞かせと絵本に出てくるメニューの調理イベントを行うこととした。

A-2 学生による食材の研究と試作

企業が扱うマンション住民が育てたサツマイモの収穫に学生が協力し、そのサツマイモを使用することとした。さらに、企業と連携する苺農家を訪問し、その苺を使用した。以上の食材を生かすことをテーマに、小麦、乳不使用のホットケーキのレシピを開発し、試作を繰り返した。

A-3 イベントへ向けた準備と実施

イベントの施行に関して企業からの意見、改善点の指導を受け、全2回のイベント内容が決定した。内容の決定後、参加者の募集方法、経営管理、イベントの進行や詳細について検討し、企業の経営するカフェで開催当日を迎えた。イベントでは学生自身が地域の親子と関わり、高評価を受けた。

B 保育園での調理実習活動

新座市内の保育園の園児3～5歳を対象に、園児とともに調理を楽しむことができる調理実習を計画した。食育として習得して欲しいテーマ、内容を決めたのち、試作を繰り返した。

※ 研究への参加人数：学生9人、教職員3人、地域団体等20人

3. 成果

A

学生が企業の方々、地域の住民の方々の反応と直接向き合うという貴重な経験となった。また、企業・大学・住民が手を取り合い、産学民の連携で地域にアクションを起こすことで、地域からの大きな反響を受けることができた。それぞれの立場の者同士が一つの目標をもって地域へ進出していくことは、多くの成長を得られる良い機会となることが実感できた。さらに、管理栄養士を目指す学生の取り組みとしては、小麦・乳製品を不使用として、地域の食材の良さをひき出せたことは大変意義が大きい。

B

地域の保育園における調理実習において、園児と本学の学生双方にとって、調理実習体験で得た楽しさと美味しさはかけがえのない経験となった。学生にとっては、授業等で習う離乳食や幼児食といった内容が、実学として身についたことや、対象者の気持ちになって企画をする大変さが学べた。







絵本の読み聞かせの様子

調理実習の様子

地域の参加者との集合写真

地域連携創造・支援事業費 No.19

研究課題名	子育て講座「はらっぱ」の開催による地域へ向けての子育て支援事業
研究代表者	川喜田 昌代(幼児教育学科 准教授)
共同研究者	権 明愛(幼児教育学科 講師) 横井 紘子(幼児教育学科 講師) 西脇 二葉(幼児教育学科 助手) 十文字 佑子(十文字女子大附属幼稚園 園長) 高橋 玲子(十文字女子大附属幼稚園 教諭)

1. 概要

子育て講座「はらっぱ」は、本学と附属幼稚園との共同企画・主催により、地域の未就園児や入園希望児の保護者、附属幼稚園の保護者を主な対象として開催している子育て講座である。平成20年度より毎年実施しており、今年度は10年目となる。

子育て講座の目的は保護者にとって最も関心のある身近なテーマと大学教員の専門的知識とが有機的につながるような内容を考えて講座を組み立て、保護者が子育てに追われる日常の中で、楽しみや喜びを見出し、希望をもって子育てを行う手助けとなることである。附属幼稚園との共同による子育てセミナーの開催を通して、大学による地域子育て支援事業の可能性について検討する。

2. 活動内容

(1) 子育て講座「はらっぱ」を5月から1月までの期間で5回開催(参加者数189人)

	テーマ	講師	参加者数
第1回	新座の過去・現在・未来	須田 健治 先生	38人
第2回	乳幼児期の子どもの心	長田 瑞恵 先生	42人
第3回	栄養と食べ物の安全・安心	志村 二三夫 先生	46人
第4回	幼稚園で育つこと	伊集院 理子 先生	28人
第5回	子どもの感性と造形表現	宮野 周 先生	35人

(2) アンケート調査による参加者の意見を参考にして29年度の講座内容や実施方法を振り返り、次年度の開催に活かすことによって継続的な開催を目指す。

(3) 「はらっぱ」講演記録集を作成して、地域の子育て支援関連機関に配布することで、本講座の目的や内容の理解を促す。

(4) 各講義の振り返りを実施し、成果と課題を明らかにして、事業内容の充実を図る。

(5) 講座開催中の参加者の子どもの保育を行う機会を設けることにより、遊びや保護者との交流により子育て支援や未満児の保育体験を学ぶ機会の提供

※ 研究への参加人数：教職員12人

3. 成果

- 今年は、継続開催10年目を迎え、本年より本学学長が大学院人間生活学研究科学科長・教授であられる志村二三夫先生になられ、学長先生からの講演もいただいた。また、長い間新座市長であられた須田健治先生(本学客員教授)をお迎えしたことで新座市の貴重なご講演をいただいた。「はらっぱ」の子育て講座は、幼稚園の保護者中心に、述べ189名の参加者を迎え、地域に根差しつながる活動への期待が一層持てた1年であった。
- 平成29年度講演記録集を作成し、地域の子育て支援関連機関に配布することで、本講座の目的や内容の理解を促す。また、学生が閲覧する機会を作ることによって、身近な保育現場である附属幼稚園において開催されている子育て支援事業の実際を知り、学ぶ機会となった。
- これからも、保護者にとって関心の高いテーマと大学教員の専門的知識とが、有機的につながるような内容をさらに考え提案していきたい。

地域連携創造・支援事業費 No.20	
研 究 課 題 名	地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用
研 究 代 表 者	小林 三智子(食物栄養学科 教授)
共 同 研 究 者	曾矢 麻理子、石井 和美、須田 有実子(食物栄養学科 助手)、 小寺 勝行(あさか野農業協同組合 JA改革推進室 室長)、 村越 暁成(丸越食品工業株式会社 取締役)、 生田目 公美枝(新座市 市民生活部 経済振興課 農業支援係長)
1. 概要 新座市は秋冬にんじんの指定産地に認定されていることから、にんじんを使用した加工食品の開発に取り組み、その成果として「にんじんドレッシング」を平成29年3月に商品化した(商品名【にんじん畑ドレッシング】)。当商品は酸味が強いという意見が多かったことから、今年度は酸味を抑えるために開発を重ね、平成30年3月に二度目の販売を行った。それに付随して、当ドレッシングを活用したレシピをリーフレットにし、商品に付けて販売できるようにした。その他、地場野菜を有効的に活用するドレッシングのシリーズ化を目指し、ごぼうのドレッシングの開発も開始した。また、スイーツの考案も行い、今年度は「にんじんのケーキ」を地域の催事や桐華祭にて発表し、地場野菜の有効活用方法として提案した。	
2. 活動内容 ① 農業体験(平成29年7月～平成30年2月 学生3名参加) 市内の農家(高橋農園)にて農業体験を実施。ジャガイモ、にんじん、大根等の収穫を行いながら、各野菜の特徴や栽培方法、また地域の農業についての話を農家の方より伺った。 ② ドレッシングの開発及びリーフレットの作成(平成29年6月～平成30年3月 学生7名参加) 平成29年度に販売した【にんじん畑ドレッシング】の酸味を調整するため、酢の割合を見直し、再度レシピを作成、平成30年3月に二度目の販売を行った。ドレッシングを多くの料理に利用してもらい、リピーターになってもらえるよう、活用方法を載せたリーフレットを作成した。また、にんじんだけでなく、他の野菜でもドレッシングの開発をしてみてもどうかという声が上がったことから、地場野菜でのドレッシングのシリーズ化を目指し、近隣地域で収穫されたごぼうに着目して「ごぼうドレッシング」の開発にも取り組んだ。 ③ 「すぐそこ新座発見ウォーキング」と桐華祭での地場野菜スイーツの販売(平成29年6月～11月 学生3名参加) 地場野菜の有効活用としてスイーツを考案した。本年度は「にんじんのケーキ」を作成し、商工会が主催する「すぐそこ新座発見ウォーキング」と桐華祭にて地域へ発信した。 ※ 研究への参加人数：学生7人、教職員4人、行政機関等1人、地域団体等3人	
3. 成果 ① 管理栄養士を目指す学生にとって農業体験を通じて得た野菜の知識は、将来管理栄養士職についてからも役立つものと思われる。農業の大変さを知ることは、食物を大切に扱うことを体得する貴重な体験といえる。 ② 継続して商品を製造することが課題であるが、昨年度に続き今年度も【にんじん畑ドレッシング】を販売できたことは、一連の製造ルートが確立してきた成果と考えている。一方で消費者から販売場所の問い合わせがあったことなどから、少しずつ地域に認知されてきていると実感している。 ③ 催事にて地場野菜を活用したスイーツを提案することで、本学が取り組んでいる研究を近隣の方にアピールする契機になったと思われる。	
 高橋農園での農業体験  にんじん畑ドレッシング リーフレット	

地域連携創造・支援事業費 No.21	
研 究 課 題 名	「NPO法人暮らしネット・えん えん食卓」食事サービス向上への取り組み
研 究 代 表 者	岡本 節子(食物栄養学科 准教授)
共 同 研 究 者	名倉 秀子(食物栄養学科 教授) 金高 有里(食物栄養学科 講師) 小島 美里(NPO法人暮らしネット・えん えん代表)
1.概要 「NPO法人暮らしネット・えん」は高齢になっても障がいがあっても共に生きる地域社会を創ることを目的としたNPO法人である。グループリビング及びグループホーム利用者を対象に、食生活の支援を学生が行い、施設利用者の食生活の向上と学生の実践的教育を図ることを目的に活動を行っている。利用者は65～95歳の高齢者であり、高齢者の嗜好に合わせた夕食献立の作成・提供し、施設を訪問して利用者と夕食を共にしながら、食事の感想や利用者の健康状態等を聞き取り、次月の献立に反映させた。利用者が嗜好的に満足度できる食事の食塩相当量と健康の維持増進、疾病予防を考慮した食事の食塩相当量には差があり、今後の課題である。	
2. 活動内容 ① 施設への訪問調査 施設へ訪問し、食事摂取状況、摂食・嚥下機能、食欲等を確認しながら、利用者との交流を図る、食生活の支援が夕食のみのため、聞き取り可能な利用者には朝食、昼食の食事摂取状況と嗜好調査を行い、聞き取り不可の利用者にはケアスタッフから情報収集をした。 ② 料理の試作・献立作成 献立作成後、料理の全体のバランス、食品、調味料の重量などを確認するために料理の試作を行った。その後、えん食卓の調理スタッフに1ヶ月分の夕食献立をメールで送付した。 ③ 訪問 2～3ヶ月に1回施設に訪問し、グループホーム利用者の喫食状況を確認し、グループリビングの利用者と夕食をいただきながら、料理の感想や食事への要望を確認した。 ④ 厨房内実習 えん食卓の厨房内で学生が自分の立てた献立を作成し、献立の適合、食事の量と質、料理の出来栄を評価し、衛生管理の指導を実施した。 ※ 研究への参加人数：学生8人、教職員3人、地域団体等1人	
3. 成果 ●今年度も引き続き行事食と減塩料理に取組み、利用者の食事への楽しみと健康を考えた食事の提供を試みた。自立した生活を営むグループリビングの利用者は減塩料理では満足度が低く、工夫を凝らす学生の献立よりもシンプルな料理を食べたいとの要望が多く、学生は献立作成に苦慮していたが、確実に献立作成能力が身に付いてきた。 ●学生は施設に訪問し、利用者と夕食を摂り直接自身の献立の評価を受けることで、管理栄養士としての業務に対して責務を実感するとともに、利用者とのコミュニケーションを図ることで高齢者施設の環境を間近に知る機会となり、社会貢献の重要性を感じることができた。 ●今後も大学在学中に管理栄養士として実践的な活動を行うことは、施設利用者へは食事を通して健康を保ち、学生にとっては学習意欲の向上と施設給食の体得につながるが見込まれる。	
 献立の試作  訪問時の様子	

地域連携創造・支援事業費 No.22	
研 究 課 題 名	ふるさとの緑と野火止用水を育むプロジェクト
研 究 代 表 者	星野 敦子(児童教育学科 教授)
共 同 研 究 者	松岡 敬明(児童教育学科 教授)、星野 祐子(文芸文化学科 准教授)、 名塚 清(地域連携推進機構)、 川畑 隼人(新座市生涯学習スポーツ課)、佐藤 弘信(HUGネット会長 川爺代表)
1. 概要 26年度にCOC事業の一環として設立された「ふるさとの緑と野火止用水を育む会(通称 HUGネット)」(会長 佐藤弘信)を活動母体として、野火止用水や雑木林等の地域の自然環境保全、人材育成、子どもたちに対するふるさとの自然を知り愛することの継承を目的として、3つのプロジェクトチーム(A雑木林保全活動 B子どもの自然体験学習等 C研修事業)を作り、学生や近隣の小学生、町内会などの参加により 具体的な活動を展開した。	
2. 活動内容 【プロジェクトA】野火止用水の環境保全 ①アジサイの強剪定後のケアならびに植生の回復(外来種除去、常緑樹の除伐)：8月4日にメンバー約30名が参加して実施した。 ②樹木ネームプレートの追加設置：11月12日に不足分の樹木プレート10枚を追加設置した。 ③「プラスの森」(大学に隣接した市の雑木林)樹木伐採：12月11日に雑木林とその整備についての講義を学生に向けて実施し、12月18日に実習、作業を行った。学生31名参加。 ④野火止用水沿い絵画展示：11月17日から12月14日入賞した35点を展示し、その後新座市観光協会、新座市と共同で賞状等を授与した。 【プロジェクトB】子どもの自然体験学習(小学生対象) ①8月20日 黒目川(栗原橋近辺)にて、魚の採取、水質検査など川での学習を実施。その後、石神集会所において採取した生きものの名前調べと観察、獲れた生きものの解説などを実施。小学生13名、HUGネットメンバー 30名、学生8名、保護者等が参加した。 ②11月12日 本多児童センターならびに本多の森において、「雑木林と炭焼き体験」を実施。小学生45名、メンバー 35名、学生22名が参加。雑木林での炭焼き材料探し、炭焼体験、出来上がった炭を使った工作などを行った。 【プロジェクトC】研修事業 ①野火止用水沿いの散策研修 11月17日 東北コミセンにおいて、「野火止用水運用に関わる歴史的、経済的産業活動について」として、宮瀧交二大東文化大学教授による講義を行い、その後「志木市東北部に展開された、野火止用水の痕跡を訪ねて」をテーマに天田眞氏(NPO法人エコシティ志木 代表理事)の指導により実地研修を実施。参加者25名 ※ 研究への参加人数：学生61人、教職員5人、行政機関等6人、地域団体等140人	
3. 成果 ①野火止用水沿いの樹木やプラスの森など、十分なケアができないまま放置されている樹木の剪定、伐採などを行い、地域課題の解決に寄与した。また樹木伐採に関する知識や技術を地域の方や学生に伝授したことも、地域人材育成につながった。 ②子どもの自然体験学習において、日本の伝統文化の継承と自然体験を組み合わせた試みを実施した。また黒目川での活動では、川や魚と親しむとともに、水質汚染や外来種の増加などの課題についても学ぶ機会を提供し、学生にとっても意義深い学びの場となった。 ③「新座市における地域人材育成のための生涯学習制度と地域ボランティアの展開」2018年3月十文字学園女子大学紀要第48集 pp255-268 ④「スマイルよみうり」2017年5月5日号「HUGネット 市民・行政・大学の連携でみどりと活力あるまちづくりを!」2017年9月5日号「黒目川で小学生が魚とりや水質検査 COC事業で子ども自然体験活動を開催!」など	
 黒目川体験の様子  雑木林と炭焼き体験 集合写真	

地域連携創造・支援事業費 No.23	
研 究 課 題 名	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ― 健康にプラス!街づくりにプラス! ―
研 究 代 表 者	星野 祐子(文芸文化学科 准教授)
共 同 研 究 者	安達 一寿(メディアコミュニケーション学科 教授)、飯田 路佳(健康栄養学科 教授)、 棚谷 祐一(メディアコミュニケーション学科 准教授)、加藤 亮介(メディアコミュニケーション学科 講師)、 原 一彰(募集広報課)、工藤 奈緒(同課)、中田 恵(同課)、安達 美奈子(図書課)、 山形 友美恵(総務課)、名塚 清(地域連携推進機構)、 福島 聡(地域連携共同研究所・プラスキャンパスプロデューサー)

1. 概要

平成26年に誕生した本学のマスコットキャラクター「プラスちゃん」。地域活動を展開していく中で、プラスちゃん存在も広く知られるようになった。学生発の企画や産学連携企画も充実しており、プラスちゃんをサポートする組織「プラスちゃんくらぶ」の評価も高まってきた。平成29年度は、学生主体のイベントを数多く展開すること、これまでと同様に地域イベントを盛り上げること、健康作りに貢献することをテーマとした。

2. 活動内容

■ イベント参加

平成29年度も様々なイベントに参加した。プラスちゃんくらぶが企画・運営するイベントから、依頼を受けて参加するイベントまで幅広い。プラスちゃんが誕生してから毎年参加しているイベントもあり、イベント主催者との連携や絆も深まってきたように実感する。

黒目川ウォーキング(4/1)、いろは親水公園まつり(4/2)、クリーン作戦(5/20)、男女共生フォーラム2017プラザまつり(6/24、25)、十文字織姫祭「七タゆるキャラショー」(7/7)、子ども大学しき入学式(7/8)、大江戸新座まつり(7/22)、イオン新座夏まつり(7/23)、キャラダイスジャパン(8/12)、子ども大学にいざ入学式(8/19)、いろはふれあい祭り(10/14)、上宗岡ハロウィンまつり(10/21)、十文字元気プロジェクト採択企画「プラスちゃんといっしょ」(12/2)、志木市民まつり(12/3)、志木瑞穂の森でのクリスマスイベント(十文字VENTUSの高齢者施設慰問)(12/16)、くまプラスウィーツプロジェクト(1/20)、西武所沢店コラボメニュー試食会(2/25)、志木さくらフェスタ(3/31)

■ 健康づくりを意識した活動

プラスちゃんのテーマソングを用いた健康体操を考案するため、関係者でミーティングを行った。子どもを対象にした体操、高齢者を対象にした体操、チェアエクササイズなど、対象や目的などを考慮し、取り入れる動きや活用方法を検討した。具体的な制作は次年度から開始する。また、学生主体のイベント「プラスちゃんといっしょ」では、地域の子どもたちを招いて「ゆるゆる運動会」を実施した。さらに、十文字VENTUSが主催のクリスマスイベントでは、「プラスちゃんダンス」を高齢者の方に披露し好評を得た。

■ 学生主催の企画

ブース出展および持ち込み企画のイベントは「プラザまつり」、十文字織姫祭での「七タゆるキャラショー」、「イオン新座夏まつり」、「プラスちゃんといっしょ」などである。年々学生主催の企画が増えてきており、PDCAサイクルを意識しながら、次のイベントに活かしている。

※ 研究への参加人数：学生30人、教職員12人、行政機関等10人、地域団体等3人

3. 成果

様々なイベントに参加し、立場の異なる人々と交わることで、学生たちは社会人基礎力を身に付けることができた。また、成功体験を重ねることで自己肯定感も高まりつつある。年度末には「プラスちゃんのプラスレター」を発行し1年間の活動成果を振り返る。「プラスちゃんのプラスレター」は行政や関係団体に配布。プラスちゃんを活用した地域活動を広く発信することで、本学の学びのあり方をアピールすることにつながっている。



プラザまつりでの取材対応



志木市民まつり



上宗岡ハロウィンまつり



大江戸新座まつり



野火止用水ご当地グルメゆるキャラ®フェスティバル

III

地域連携共同研究所

Ⅲ 地域連携共同研究所

研究分野、組織を超えた連携により、本学及び地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させる新たな研究組織として平成27年4月1日に設置されました。

1 平成29年度採択研究プロジェクト

平成29年度は、地域連携共同研究所の課題として、健康長寿のまちづくりをテーマとした研究課題など、次の5件を採択しました。

No.	研究課題名	研究代表者	実施年度			
			26	27	28	29
1	食育で育む管理栄養士の専門性	食物栄養学科 教授 長澤 伸江		●	●	●
2	十文字学園女子大学シニア健康教室	健康栄養学科 教授 高橋 正人		●	●	●
3	ワークショップによる合意形成の手法の開発とまちづくりサポートのスキーム構築に関する研究	文芸文化学科 教授 松永 修一			●	●
4	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導	健康栄養学科 教授 池川 繁樹	※	※	●	●
5	地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み	人間福祉学科 准教授 野島 靖子			●	●

※地域志向教育研究費にて採択

2 実績報告

地域連携共同研究所で採択された研究プロジェクトの実績報告をまとめた「地域連携共同研究所年報」を各年度ごとに発行しています。第3号は平成30年7月に発行しました。



Ⅳ

活動の記録

Ⅳ 活動の記録

1 会議等

会議等	概 要
7月20日（木）16：00～17：00 F D ・ S D 研修会 本学4号棟431教室	○知的財産セミナー ●「大学の教職員は毎日、『知的財産』を生んでいる！」 みぎのうで（株）代表取締役／代表弁理士 田村 恭佑 氏 ●「知財を生む・活用する産学官連携～連携タイプとQ＆A」 お茶の水女子大学 知的財産センター 講師 北岡 タマ子 氏
8月1日（火）13：30～15：00 平成28年度地域志向教育研究費採択課題 成果報告会 本学7号館1階カフェテリア	○平成28年度地域志向教育研究費に採択されたC O C 課題の取組成果の報告会を ポスターセッション形式で実施 ●掲示したポスターや資料の前で、担当の教員や学生が参加者に説明、質問に 受け答え ※ポスター展示 7月25日～7月29日
8月1日（木）14：30～16：30 第1回地域連絡協議会・ ＋（プラス）キャンパス連絡会議合同会議 本学8号館8207教室	○C O C 事業の平成28年度実績報告・平成29年度事業計画 ○活動事例報告 「地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用」 ～新座産のにんじんを活用したドレッシングの商品化～ 研究代表者 食物栄養学科 小林 三智子 教授、 曾矢 麻理子 助手、小林ゼミ学生3名 ○意見交換 （出席者：関係機関11名、本学18名）
10月26日（木）14：00～16：00 第2回地域連絡協議会 （新座市との意見交換会） 本学7号館6階会議室	○「快適みらい都市」の実現に向けた市政運営について ○地域連携フォーラムに向けて ●これまでのC O C 事業に関する取り組み ●子育て支援に関する研究活動の事例報告 ＋（プラス）ママ子育てサロン（幼児教育学科 上垣内 伸子 教授） フィンランドにおける子育て支援制度（ネウボラ）の地域への応用について （幼児教育学科 向井 美穂 教授） ○意見交換 新座市：市長、教育長、総務部副部長、企画財政部長、経済観光部長、福祉部 副部長、健康増進部長、教育総務部長、学校教育部長、子育て支援課子育て支 援係長、同課同係主事、企画課主査、同課主任（13名） 本 学：地域連携推進機構構成員、教育担当副学長、募集・就職担当副学長、 幼児教育学科上垣内教授、同学科向井教授（15名）
2月8日（木）13：30～15：30 第2回＋（プラス）キャンパス連絡会議 本学7号館6階会議室	○地域を学びの場とする学生の地域貢献活動 ●学生の地域貢献活動の状況報告 ●地域貢献を学びと結びつけたP B L の取り組みの事例報告 東野ココフレンドでの児童への食育活動（食物栄養学科 井上 久美子 准教授、 井上ゼミ学生6名） 新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU」の編集協力等（メディアコミュニ ケーション学科 石野 榮一 教授、同学科 学生2名） ○意見交換 （出席者：関係機関8名、本学17名）

2 C O C 事業 地域連携フォーラム

平成30年2月24日（土）、C O C 事業地域連携フォーラムを開催し、行政関係者や地域の方々、他のC O C 大学の教員、本学の教職員など、約80名が参加しました。

第1部の基調講演では、共愛学園前橋国際大学の大森昭生学長をお迎えし、「地学一体で取り組むC O C 事業の成果と課題～共愛学園前橋国際大学の事例から～」と題して、ご講演をいただきました。同大学の取り組み事例を中心に、学生を地域で育ててもらうということの重要性やその成果、これからの地域人材育成のキーワードとなる「一体協働」の必要性など、示唆に富んだお話を聞くことができました。

第2部では、これまで本学が継続的に取り組んできた地域課題解決のための研究プロジェクトについて、「子育て支援」「健康長寿」「地域力の向上」の分野から計7課題の成果発表を行いました。本学の教員だけでなく、連携している行政や地域、企業の方々にもご登壇いただき、研究活動に対する評価や今後期待することなどを発表いただきました。

成果発表の後、大森学長から「地域の課題にしっかりと切り込んでいく研究であり、地域の活性化ということも踏まえていた。どの研究プロジェクトも学生が参加しており、地域と大学の真ん中に学生がいるというC O C のあり方が見えた。学生の参加を参画へと深化させ、学生が自ら企画し、さらには地域の方に学生を預けるという環境ができれば、持続可能な地域人材の育成に繋がっていくと感じた。」との講評をいただきました。また、C O C 採択大学である園田学園女子大学の大江篤教授からは「学生には地域に出て本気の大人と出会ってほしいと言っている。学生が地域課題を解決し提言できるような教育成果は、4年間で簡単に結果が出るものではない。あの時の経験があったから今の自分があると将来話せるような経験ができるプログラムがC O C である。C O C に取り組む女子大学として、2大学が東と西で連携・協力して取り組んでいければと思う。」との講評をいただきました。

最後に、成果発表のモデレーターを務めた星野敦子教授（地域連携推進機構 機構長代理）が、「大森学長から、学生の参加から参画へ深化してほしいとのお話をいただいたが、学生が自ら課題を見つけて解決するという活動も少しずつ見えてきている。行政や地域の皆さんの力をお借りしながら、地域の未来づくりにまい進したい。」と熱く語りました。

◇日程等 平成30年2月24日（土）14：00～17：00、会場 ふるさと新座館ホール、新座市共催

◇プログラム

▷開会挨拶 学長／地域連携推進機構 機構長 志村 二三夫

▷新座市長挨拶 新座市長 並木 傑 氏

▷第1部 基調講演

地学一体で取り組むC O C 事業の成果と課題～共愛学園前橋国際大学の事例から～
共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏

▷第2部 成果発表

モデレーター 児童教育学科 教授／地域連携推進機構 機構長代理 星野 敦子

1.研究プロジェクトの成果発表

○子育て支援

○学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み

人間発達心理学科 教授 布施 晴美／新座市社会福祉協議会 総務課管理係長 倉方 博章 氏

○親子支援プロジェクト

人間福祉学科 准教授 山口 由美／NPO法人志木子育てネットワーク ひろがる輪代表理事 小笠原 順子 氏

○子ども元気プロジェクト

幼児教育学科准教授 鈴木 康弘／株式会社西武ライオンズ 事業部 別府 学 氏

○健康長寿

○地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み

人間福祉学科 准教授 野島 靖子／野火止四丁目上町内会 会長 高石 光治 氏

○地域力の向上

○地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用

食物栄養学科 教授 小林 三智子／新座市 経済振興課農業支援係長 生田目 公美枝 氏

○地域密着型メディアによる情報発信

メディアコミュニケーション学科 准教授 棚谷 祐一／クローバーラジオ パーソナリティ 美和 さなえ 氏

○ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業

人間福祉学科 講師 久保田 葉子／ふるさと新座館 館長 大熊 正 氏／児童教育学科1年生

2.講評

共愛学園前橋国際大学 学長 大森 昭生 氏、園田学園女子大学 教授 大江 篤 氏



3 社会貢献活動

(1) 産官民学連携による社会貢献活動

西武ライオンズ 新座市	○H28.4.21 (株) 西武ライオンズと本学との「連携協力に関する基本協定」締結 ●大学との連携協力により、フレンドリーシティ（自治体との連携）の取組を拡充し、西武ライオンズ、新座市と連携して産学官の協働事業を実施 ○西武ライオンズ主催の社会貢献事業（学生の活動実績） ●LIONS HAPPY MOTHER'S DAY (H29.5.7) 15名 ●WFPウォーク・ザ・ワールド in メットライフドーム(H29.6.10) 1名 ●第3回ライオンズカップ車椅子ソフトボール大会 (H29.9.1 ～ 3) 2名 ○ベースボール型授業研究会 (H29.5.4) ●小学校でのベースボール型授業の指導方法の共同研究 (児童教育学科 山本 悟 教授) ●児童教育学科の前期授業「身体運動Ⅰ」でライオンズOBが実技指導、97名受講 ○「親子野球教室」(H29.10.21) ●西武ライオンズ・新座市・大学共催 (33組参加) ●新座市：募集、大学：場所の提供・学生運営スタッフ、西武ライオンズ：OB派遣・道具の提供 (学生スタッフ：前記ベースボール型授業を履修した児童教育学科1年4名、幼児教育学科3年3名、4年1名) ○幼児向け「親子でベースボール体験」(H30.1.20) ●西武ライオンズ・新座市・大学共催 (28組参加) ●上記「幼児向け野球遊びプログラムの共同研究」の一環として実施 ●学生スタッフ：幼児教育学科鈴木康弘准教授の授業「幼児運動論」履修学生3年17名	 
新座市 (株) オーシャナイズ	○大和田ココフレンドの運営 (H29.7.21 ～ 8.28) ●ココフレンド*の夏休み期間中の運営を企業がサポートする取り組みに学生21名が運営スタッフとして参加	
志木市 カゴメ (株)、他	○志木市「おいしく減塩！『減らソルト』フェスタ」に協力参加 (H29.11.23) ●市民への減塩の普及啓発イベント ●チェアエクササイズ：健康栄養学科飯田路佳教授、学生15名 ●学生考案の減塩メニューの試食コーナー（減塩レシピを配布）：食物栄養学科岡本節子准教授、岡本ゼミ学生8名	
西武所沢店	○西武所沢店のレストラン新メニューの共同開発 ●食物栄養学科の小林ゼミ・金高ゼミの学生が同店のレストラン7店舗の新メニューを旬の地域食材を使って共同開発し、レシピを提供（参加学生16名）	
イオン新座店	○イオン新座店の夏祭り・打ち水大作戦への“プラスちゃんくらぶ”の参加 (H29.7.23) ●同くらぶの学生が企画した子どもたちが楽しめるイベントを同店と連携して実施	
新座市	○「健康と食に関する講演会」を新座市と共催で実施 (H29.12.9) ●講演1：「“長寿菌”が命を守る！～大切な腸内環境コントロール～」(理化学研究所 辨野義己特別招聘研究員) ●講演2：「食育への取り組み」（本学食物栄養学科 長澤伸江教授）・チェアエクササイズ（本学健康栄養学科飯田路佳教授） ●講演3：「運動による元気の築きと食べ物・栄養」（順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 鈴木良雄先任准教授）、参加者：190名	
和光市文化振興公社	○公益財団法人和光市文化振興公社との相互協力協定 (H28.9.1締結) に基づき、「サンアゼリア」（和光市民文化センター）でのコンサートなどの事業運営に学生が参加 ●活動実績 - H29.11.3 童謡フェスティバル “子どもたちとつくるコンサート” 3名 - H29.11.12 和光市民まつり 射的ゲーム出店 3名 - H29.12.2 ～ 12.3 落語ミニ公演＆ワークショップ、成果発表会 3名 - H29.12.23 ～ 12.24 オペラ彩 第34回定期公演 各3名 - H30.1.14 ニューイヤーコンサートin和光 “東部方面音楽隊が贈る吹奏楽” 各3名 - H30.1.21 NHK公開録画 “ノージーのきらめき工房” 2名	
商店会 埼玉県 新座市 朝霞市 自衛隊 地域団体等	○第3回「さくらまつり 黒目川ウォーキング」の開催 (H29.4.1) ●栄四丁目商店会が開催している地域活性化イベント「さくらまつり」に合わせて、同商店会と共催で本学が実施 ●協力：埼玉県朝霞県土整備事務所、新座市、朝霞市、自衛隊埼玉地方協力本部、埼玉南部漁業協同組合朝霞支部、黒目川に親しむ会、ミョウオンサワハタザクラを守る会、畑中ホテル愛好会、ふるさとの緑と野火止用水を育む会、チーム・キャロット、COZY & SMILE CAFE、埼玉南部読売会・読売新聞朝霞支部	

※ココフレンド（新座市子どもの放課後居場所づくり事業）：子どもたちが安全・安心に集える居場所として、小学校施設（教室や校庭など）を活用し、地域の協力を得ながら、学習や遊び、体験・交流活動などの機会を提供することにより、子どもたちが地域社会の中で心豊かで健やかに育つ環境づくりを推進する事業

(2) PBL*による社会貢献活動

ココフレンド	○東野ココフレンドでの食育活動 (H29.10.30、11.14) ●食物栄養学科 井上久美子ゼミの学生が“やさいはかせになろう！”をテーマに、児童への食育活動を企画・実施 ○大和田ココフレンドでのニュースポーツ体験事業 (H29.12.12、12.19) ●健康栄養学科 高橋京子ゼミの学生が“子供たちにニュースポーツとの出会いを提供するプロジェクト”として、タスポニーやアルティメットなどのニュースポーツの児童への体験事業を企画・実施	
新座市男女共同参画 推進プラザ	○新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU」第45号・第46号の編集協力 ●男女共同参画社会を若い女性が考える機会を作る趣旨で制作依頼を受け、メディアコミュニケーション学科の授業（石野榮一教授指導）を通して学生が市内事業者へのインタビューの企画立案・実践、原稿作成	

※PBL (Problem Based Learning、課題解決型学習)：現実の問題・課題に対して、個人またはグループで、その課題を解決するためのアイデアの創出、計画立案、実現などに取り組み、そのプログラムを通じて「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」などの社会人基礎力を養成する学習方法（学習の主体は学生で、教員が学習を支援）

(3) 学生による社会貢献活動

自主社会活動	○地域連携共同研究所の研究プロジェクト「シニア健康教室」、志木市健康イベント「減塩フェスタ」にスタッフとして参加	
地域志向科目の授業	○地域志向科目等の授業を通じて市の事業、地域イベントなどに参加 ●活動実績 - 西分夏まつり(H29.6.24)・野火止用水ホタルの夕べ(H29.6.25)、新座市男女共同参画週間イベント(H29.6.24～25)、第3回大江戸新座祭り(H29.7.22)、朝霞市彩夏祭(H29.8.5～6)、埼玉県・朝霞市・新座市国民保護実動訓練(H29.8.24)、新座っ子ばわあっぶくらぶ(森の子くらぶ) など	
COCセンター	○ゾウキリンInstagram企画「新座愛を届けるゾウ」への参加 ●新座の魅力などを書いたメッセージボードを持ってゾウキリンと写真撮影し、Instagramで紹介して新座市の魅力を発信 ●プラスちゃんくらぶ、ゾウキリンくらぶ、J和太鼓部、吹奏楽部などが参加	
学生ボランティア団体	○“ゾウキリンくらぶ”による活動 ●第3回野火止用水灯明まつり：他大学ボランティアと参加し、野火止用水遊歩道などにLED灯明を設置 (H29.6.24～25) ●産業フェスティバル：商工会青年部と「大声コンテスト」を開催 (H29.10.8)	
十字字元気プロジェクト	○学生企画イベント“プラスちゃんといっしょ” (H29.12.2) ●大学キャラクター交流会 (宇都宮大学、成蹊大学、首都大学東京)、大学や企業、自治体のキャラクターによる地域の子どもたちが楽しめるイベントを実施 ○“くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興&新座活性化!! ～” (H30.1.20) ●食物栄養学科3年8名（指導教員：同学科金高有里講師）が熊本復興支援と新座の活性化を目的に、熊本県と新座市の特産品を使用したオリジナルスウィーツを考案して新座市内ペーカリーと共同で商品化し、野火止ふるさと広場で販売（共催：J A あさか野、後援：新座市）	
部活動	○J和太鼓部：春の全国交通安全運動 出発式に出演 (H29.4.5) ○吹奏楽部：新座市国際交流デーに出演 (H29.11.12)	
その他	○一日警察署長 春の全国交通安全運動 出発式 (H29.4.5)、秋の全国交通安全運動 出発式 (H29.9.21) ○平林寺 半僧坊大祭「伊豆殿行列」への出演 (H29.4.17) ○イオン新座店「打ち水大作戦」への参加 (H29.7.23)	 

4 ボランティアセンター

ボランティアセンターでは、外部からのボランティアに関する情報を収集・整理・提供し、ボランティアコーディネーターが活動を希望する学生の相談対応やマッチングを行っています。

また、学生同士が学科や学年の枠を超えて交流し、ボランティア活動への意欲を高め合う場としても活用され、講座や学習の機会も設けています。

○開室時間 平日10：00～17：00

○役割

- ボランティアに関する情報の収集と提供
- ボランティアに関する相談への対応
- ボランティア学生を求める地域や団体との調整
- ボランティア活動を行うための準備や話し合いの場の提供
- 学生スタッフの育成

(平成29年度の実績)

利用者数（来室者延数）	3,046人（学生2,599人、教職員340人、学外107人）
情報受付件数	166件（情報の内容：ボランティア募集、ボランティア関連の研修・講座、活動情報誌）
活動実績（延人数）	186人
団体等との調整	429件（メール、電話等での需給調整件数含む）
平成29年度 学生スタッフ	22人

○スタッフ活動の様子

- ミニイベント



手話歌や他学科・学年を超えての交流など、ミニイベントを35回開催しました。その他の様子は、本学HP【ボランティアセンター】から見るができます。

- 発行物等 チラシやJボラ通信なども学生スタッフが作成しました。



ボランティアセンターチラシ



情報誌「Jばら通信」（年6回発行）



平成29年度活動報告書

5 広報

○COC事業パンフレットの改訂版の制作（平成30年2月発行）

○ホームページ

- 平成28年4月にリニューアルした地域連携活動ホームページから、地域連携・社会貢献活動、COC事業、地域連携共同研究所の情報を発信



○COCニュースレター

Vol.11（H29.6.22発行）	● COC研究プロジェクトの紹介（2件） ● 新座市民総合大学が開講、ボラセン開設1周年 ● 平成29年度の地域志向教育研究費の研究テーマ一覧 ● 前期公開講座の案内
Vol.12（H29.10.27発行）	● COC研究プロジェクトの紹介（2件） ● にんじん畑ドレッシングのレシピを開発中 ● 開催案内（健康と食に関する講演会、学園祭での地域と連携したワークショップ&マルシェ） ● 後期公開講座の案内
Vol.13（H30.2.13発行）	● COC研究プロジェクトの紹介（2件） ● 地域連携フォーラムの開催案内 ● COC研究活動のトピックス（2件）

○COCセンターニュース

- 学生の地域貢献活動等を紹介するCOCセンターニュース（No.59～No.85）を作成し、COCセンター掲示板に掲示



V C O C 事業評価

1 自己点検・評価委員会

平成30年5月17日(木)に開催したCOC事業自己点検・評価委員会において、第二期 学校法人十文字学園中期目標・中期計画(平成28～32年度)の平成29年度計画に対する自己評価を行いました。

中期目標 (平成28～32年度)	「地(知)の拠点整備(COC)事業」を始め地域を志向した教育・研究を全学的に推進し、「地域の知の拠点」としての機能を高めて地域社会の更なる活性化に貢献する。		
中期計画	平成29年度計画	自己評価・達成状況	
地域課題解決を担う学生を育成するため、地域志向科目の拡充など、地域社会への関心と理解を深める取組みを全学的に実施する。	COC調書に基づく事業計画を実施する。	100%	事業計画に基づき、事業を実施することができた。
	地域志向科目に加え各団体等との相互協力協定に基づく行事など学生が参加する機会の拡充を図るとともに、学生が自主的に活動するための仕組みを検討する。	80%	地域志向科目の授業を通して地域活動に参加する学生数が平成28年度と比較して117名増加(H28:147名、H29:264名)しており、学生の参加機会の拡充を図ることができた。学生が自主的に活動するための仕組みについては、継続検討中である。
地域の課題解決のための研究や現職教員等の資質能力向上のための取組みを、自治体や教育委員会等と連携し全学的に推進する。	「地域志向研究費」について、平成28年度に行った募集要件の見直しによる結果を検証し、さらなる研究活動の活性化を図るための改善を行う。	100%	平成29年度の地域志向教育研究費に採択された研究プロジェクト23件のうち、21件が継続研究であり、COC事業の最終年度に向けて研究の深化に主眼を置いた研究活動を推進することができた。
「地(知)の拠点整備(COC)事業」を始め地域を志向した教育・研究を全学的に推進し、「地域の知の拠点」としての機能を高めて地域社会の更なる活性化に貢献する。学生や教職員の社会貢献活動を全学的に支援する。	学生や教職員の学外活動を円滑に行うため、学内における窓口の在り方等について検討する。	80%	COC事業に係る学生、教職員の地域活動への支援をCOCセンターが、学生の自主的なボランティア活動への支援はボランティアセンターが担っているが、COC事業終了後の支援体制も念頭に、支援の在り方等について継続検討中である。
地域連携コーディネーター等を継続して配置し、地域連携推進機構の企画、運営、コーディネート、広報機能を強化し、共同研究や自治体等との共同事業等を企画、実施する。	COCニュースレターやホームページの見直しを行うとともに、様々な媒体を通して学生や教職員の活動の情報を積極的に発信する。	80%	COCニュースレターについて、デザインの見直しや内容の充実を図った。また、広報にいざや新座市・志木市のHP、連携している西武ライオンズのHP、テレビでの放映などの多様なメディア媒体を通して情報発信を行うことができた。
	COC事業の最終年度(平成30年度)に向けて、新座市以外の周辺4市との連携活動を推進する。	80%	志木市の健康イベント「減塩フェスタ」をはじめ、地域イベントや芸術文化イベントなど、様々な分野で、教員・学生による新座市以外の連携自治体との連携活動を推進することができた。

C O C 事業評価

2 外部評価委員会

平成30年3月7日(水)に開催したCOC事業外部評価委員会において、これまでのCOC事業の最終年度に向けた総括を報告した後、審議が行われました。

(外部評価委員会 委員出席者) 金子 廣志(新座市教育委員会教育長) 木村 眞琴(株式会社ニコン 代表取締役会長) 佐々木 正峰(公益財団法人文化財建造物保存技術協会理事長、国立科学博物館顧問、元文化庁長官、本学園顧問) 渋谷 治美(放送大学 特任教授〈埼玉学習センター所長〉、埼玉大学名誉教授、元埼玉大学副学長) 杉元 葉子(相模女子大学学芸学部生活デザイン学科建築工房 教授) 藤井 敏信(新座市都市計画審議会会長、新座市景観審議会会長、東洋大学地域活性化研究所 客員研究員、東洋大学名誉教授) 山名 美和子(歴史作家)
(主な意見) ○COC事業の地域連携を単なるお手伝いに終わるのではなくて、自らの学びとどうリンクさせていくかということが大事である。学生の地域活動が自分の学生としての在り方とどう関わるのか、どういうテーマを持って地域との関わりを進めているのかというところを、明確に持ちながら進めていかなければならないと思う。テーマをしっかりと明確に持ちながら、地域連携を進めていくと、まさに地域にとっても、学生・大学にとっても有益なものになっていくのではないかと思うので、その方向を見失わずに進めていただきたい。 →COC事業がスタートした時の1年生が、今ようやくゼミ活動に入り、専門的な活動や勉強を進めている時期に来て、そのような片鱗が出てきている。具体的には、食物栄養学科の学生が食の意識や食生活の改善のための専門知識を活かした子どもと保護者向けの教材を考案し、新座市のココフレンド(子どもの放課後居場所づくり事業)で子どもたちへの食育活動を行った。いろいろな地域活動に関わり地域を学んだ学生たちが、専門のゼミに入ったときに、専門を活かして自ら発案できるように、検証していきたいと思う。 ○学生が自分の取り組んだ活動について、自身で結果を検証し、他者からの評価を受け止めて、それを力にして社会に出ていきたい。 ○新座市のまちづくりの将来に向けてどう提起していくかという部分が欠けていると思う。計画的な視点、提案的な視点を持って踏み込んでいくことが非常に大事ではないかと思う。 →新座市の快適みらい会議への本学の学生の参加など、ご指摘のような動きが出てきている。COC大学として、もっと積極的に大学からそういった活動も進めていきたいと思う。 ○来年度が最終年度となるが、現段階でCOC事業終了後の活動の在り方などの基本線が決まっておらず、計画性が足りない部分があると思う。それによって、将来の予算をどう確保していくのかといった流れに繋がっていく。 ○この地域の中で大学がCOCをやりながら、どんな世界を作り上げていきたいのか、その姿を一度描いてみるべきと思う。強点と弱点、脅威と機会といった観点から、将来像に向けて、我々はいま何者であるのか、何がまさに出発点になると思う。将来のやりたい存在に向けて、十文字と地域の方を含めて、どのようなベクトルで進んでいくのか、そうすると色んな多彩な授業の中で、この部分は落としてもいいのではないかとか、この部分はもっとお金をかけなくてはいけないとかがもっと見えてくると思う。そういう流れの中で、地元に貢献できるCOCというものを作り上げていく。それは逆に、持続性があって、将来に向かって、長年に亘ってできる事業になり得ると思う。ぜひ長い目でそういった基本プラン作っていただきたい。 ○地域の課題の捉え方について、もう少し総合的な視点も含めながら、体系的に取り組んでいく必要があると思う。それにより、基礎的な研究と具体的な地域での活動が繋がり、お互いにフォローし合っていくようになると、非常に意味が出てくると思う。また、地域貢献活動の構造化を行い、学生にとっての活動の意味を言ってあげることが必要との印象を受けた。 ○地域連絡協議会等での地域からの要望と、それに対する対応など、課題と成果、推進方法などについても示してほしい。 ○COC事業について、思慮工夫され、努力もされていて、大学をある意味では牽引する、評価を高めるという点で成果を上げられたことは評価をする。 ○地域志向教育は、主に新座市を中心としているが、思考力や具体的方策などを学修させる意味では、いずれの地域でも通用する汎用性の高い事業であり、これを深めていかなければならない。COC事業の総括の中でこれを明示しておく必要がある。 ○振り返り授業は極めて重要であり、グループや全体構造の中で、自分のやったことを振り返り、組織的に行われているのか、きちんとした形で体系的に整理されているのか、ということを学生一人一人が反省し、今後に生かしていくことが大事で、それが汎用性のある思考力、行動に繋がってくると思う。そういった観点では、学生の授業評価を通して、学生の反応を考慮に入れながら考えてほしいと思う。 ○地域を活性化させるためにはグローバルな視点からのモノの見方・考え方が非常に大事であり、今後は益々その傾向が強くなる。グローバル化が進むほど、競争ではなくて、協調や協働などの問題になり、地域性を育てる教育と国際性を育てる教育を、調和的に、総合的に行う必要がある。国際性を育てる教育をどうするのかということについて、COC活動の中で考えていただきたい。その際、日本人学生と留学生と一緒にチームを組んで地域で活動することで、日本人学生は、外国人学生がどういう思考をするか、どういう行動をするかということを学ぶだろうし、なんらかの形で、そういった学習の可能性を検討してほしい。

VI

資料

Ⅵ 資料

1 新聞掲載記事等

① 各新聞



朝日新聞 2018年 1月18日付



埼玉新聞 2018年 1月18日付



東京新聞 2018年 1月19日付

② スマイルよみうり（朝霞・志木・和光・新座エリア/読売新聞折込／埼玉南部読売会朝霞支部「スマイルよみうり」事務局発行）

地域のスマイル：十文字学園女子大学による地域連携（シリーズ）

発行日	掲載記事
2017.5.5	① HUG（ハグ）ネット 市民・行政・大学の連携で緑と活力のあるまちづくりを！
2017.6.5	② 志木駅周辺でも活動中！駅前クリーン活動に参加！6月にはほんとぶらざで無料のカフェを出店
2017.7.5	③ 十文字学園女子大学ふるさと支援イベント「神川発！オーガニックなタベ」
2017.8.5	④ スポーツも頑張ってます！「FC十文字VENTUS」に注目！初のバレーボール大会も開催！
2017.9.5	⑤ 黒目川で小学生が魚とりや水質検査 COC事業で子どもの自然体験活動を開催！
2017.10.5	⑥ 「愛の告白タイム」も？10月8日に「新座市産業フェスティバル」で大声コンテスト
2017.11.5	⑦ 「ふるさと支援隊」（中山間部支援活動）旧神泉村（児玉郡神川町）でオーガニックツアーを開催！
2017.12.5	⑧ HUGネットが子ども自然体験を開催 雑木林散策と炭焼き体験に夢中！
2018.1.1	⑨ 1月18日（木）から4日連続 十文字の森でプレーパークを開催！
2018.2.5	⑩ 新座市栄四丁目餅つき大会に参加 お餅つきにも挑戦！



スマイルよみうり

2017年5月5日

③ 広報にいざ

発行日	掲載記事
2017.9月号	○ 埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催「親子野球教室」募集案内
	○ 十文字学園女子大学・教育委員会共催事業「ふるさと新座✕オータムコンサート」募集案内
	○ 十文字学園女子大学シニア健康教室・体力テスト募集案内
2017.10月号	○ Niiza Photo Gallery「テロを想定した国民保護訓練を実施」 総合科目「危機を乗り越えて生き抜く力（私たちの周りの「安全」を考える）」の授業の履修学生が訓練に参加
	○ 新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU ～女子学生が聞く男女共同参画社会 Part1～」第45号 市の依頼を受け、メディアコミュニケーション学科の授業（石野榮一教授指導）を通して学生が市内事業者へのインタビューの企画立案・実践、原稿作成
2017.12月号	○ Niiza Photo Gallery「収穫祭&国際交流デー 11月12日市役所で同時開催」 国際交流デーのステージで本学吹奏楽部が演奏
	○ 埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催「幼児向けイベント 親子でベースボール体験」募集案内
2018.1月号	○ Niiza Photo Gallery「野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラ®フェスティバル」 本学のプラスちゃんと“プラスちゃんくらぶ”の学生が出演
2018.3月号	○ Niiza Photo Gallery「ふるさと新座商店会主催の“チャリティーもちつき大会”開催」 児童教育学科 狩野浩二教授ゼミの“文化継承プロジェクト”の学生が出店、地域志向科目を通じて本学学生が参加
	○ Niiza Photo Gallery「埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催“親子でベースボール体験”を開催」 埼玉西武ライオンズと新座市、本学と連携協力に関する基本協定に基づき産学官連携の協働事業として、2018.1.20本学で幼児向け「親子ベースボール体験」イベントを開催
	○ 新座市男女共同参画情報紙「FOR YOU ～女子学生が聞く男女共同参画社会 Part2～」第46号 市の依頼を受け、メディアコミュニケーション学科の授業（石野榮一教授指導）を通して学生が市内事業者へのインタビューの企画立案・実践、原稿作成



埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催
幼児向けイベント
親子でベースボール体験

1月20日(中) 十文字学園女子大学記念ホール
で、幼児向けの「親子でベースボール体験」が開催されました。当日は28期56名の親子が参加し、埼玉西武ライオンズOBからボールの投げ方やバットの振り方など、基礎から丁寧に教わっていました。参加した皆さんは野球の魅力や楽しさを体験しました。



広報にいざ 2017.12月号

広報にいざ 2018.3月号



「十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科の学生」

FOR YOU フォーユー
男女共同参画社会の実現に向けて

男女共同参画情報紙 第46号

～女子学生が聞く 男女共同参画社会 Part2～

男女共同参画社会について若い女性たちに考えてもらう機会を作りたいと考え、十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科・石野榮一教授の協力を得て、同大学の学生に市内の事業所へインタビューしていただきました。その一部を抜粋します。

「挑戦すること」が原動力
十文字学園女子大学教員 加藤剛子さん

十文字学園女子大学の加藤剛子先生に「男女共同参画についてインタビューしました。」

加藤さんの専門は幼児教育で、小児の身体発育・子どもの発達支援を主に研究されています。国立保健医療科学院に勤務後、本学幼児教育学科の教授に就任され、平成29年4月からは副学長も兼務されています。

最初から無理だとあきらめない

忙しい毎日を送る加藤さんは、副学長就任に当たって、多くのプレッシャーを感じたそうです。

「初めて仕事に就いた頃は、男性中心の社会にあって女性である自分がどこまでできるのか不安もありましたが、尊敬している先輩が『大変な仕事であっても、最初から無理だと決めるに、やってみることが大切だ』と語ってくれたことがあり、その言葉を原動力にして様々なことに取り組んできました。無理だと決めてしまうと、自分の視野が広くなりません。挑戦し経験することで、多くのことを学び、自分の糧になるのではないかと考えています。」と副学長就任についてもそのように考え、引き受けたと話してくださいました。

男女共同参画は、生涯にわたり男女平等意識を育む地域社会づくりや平等で働きやすい職場をつくり、互いを認め、思いやり、人権を尊重する社会を目指しています。

こうした取組に対して、加藤さんは「これまで男性主体の社会から、女性も活躍できる場が増え、存在感

女性の力が発揮できる職場を
社会福祉法人ゆずの木の理事長 高山俊樹さん

社会福祉法人高山俊樹理事長に「お会いし、お話を伺いました。」

中林寺の境内林を目の前に臨む「ゆずの木の新座」は、社会福祉法人ゆずの木の本部、特別養護老人ホームを中心に障がい児フリースクール（診療所）、通所リハビリテーション、認可保育園、施設「キッズステイ新座保育園」を併設した高齢者福祉複合施設で、「介護・医療・保育」を1か所に集約した施設です。

施設全体の職員は、大学生から65歳くらいまで幅広く、そして女性が約8割を占めています。そのため、出産や子育ての面で働きやすい環境づくりを力を入れているそうです。

産休から復職を希望する職員のために、併設した保育園を利用できるようにしてあり、さらに勤務時間も30パターン以上用意し、子育ての生活スタイルに合った働き方ができるように配慮しています。「働きたい

女性に働けない女性の人数を減らしたい」と考えています。」と高山さんは語られています。

また、同施設は埼玉版ウーマノミクスプロジェクトにも参加しています。このプロジェクトは、女性が働き手となり消費や投資の強い手となり、自己実現をしていきいきと輝く社会にすることを狙いとした埼玉県独自の取組で、「多様な働き方実践企業認定制度」や「企業内保育所の整備への支援」などがその内容となっています。

高山さんは、「施設開設から7年目に入り、女性職員が年々増えていることを踏まえ、女性の力を存分に発揮してもらうためプロジェクトに参加したが、参加してからは、より一層子育て世代の職員が増え、また」と変化を挙げ、また「こうした取組をさらに進めることが、施設運営の面でも必要だと考えています。」と語られました。

高山さんに、私たち若い世代に向けたアドバイスや、働く上でのような点に気づけるべきなどをお聞きしたところ、「いろいろな仕事があると思いますが、とにかく3か月は頑張ってもらいたいですね。必ず手ごたえをつかめるはずです。」と温かな言葉をいただきました。

(後田みなみ、サイキンヨウ、大槻優里希、坂巻美帆、藤ノ木彩穂)

「FOR YOU」には、異の男女共同参画社会実現に向けたメッセージを、全ての人が「FOR YOU」に発信したいとの願いが込められています。

年2回、春号と秋号に発行しています。

有識者は賛意に感謝

メディアコミュニケーション学科を担当する授業(企画・インタビュー手法は、インタビューの企画立案から実践、そして原稿作成という一連の流れを学生に体験させ、コミュニケーション能力を養成することを目的としています。

今回、新座市男女共同参画推進プラザから男女共同参画情報紙の制作について、学生とコラボレーションでできいかというご相談をいただきました。インタビュー実践に絶賛の賛意であり、学生にとって実社会で活躍している方々のお話を伺うことができる有意義なご提案と受け止め、授業で取り組むことにしました。

グループに分かれ市内の方々に会い、インタビューの難しさを実感したそうです。

それでも先輩講師の適切な対応に何となく乗り越えることができました。多くのアドバイスをいただき、働くことの意義を感じ取ったようです。ご協力いただいた皆様方にあためて感謝申し上げます。

十文字学園女子大学教授 石野榮一
編集・監査 加藤剛子

に「いざほ」から新座市男女共同参画推進プラザ ☎0484806039

広報にいざ 2018.3月号

④ 自治体等のホームページ

新座市	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催事業 親子で体験！野球教室」を開催しました（2017.10.26掲載）
	東野ココフレンドで十文字学園女子大学学生による食育講座を実施しました（2017.11.12掲載）
	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学園女子大学共催 幼児向けイベント 親子でベースボール体験を開催しました（2018.1.22掲載）
志木市	「おいしく減塩！『減らソルト』フェスタ」を開催しました（2017.12.4掲載） 本学健康栄養学科、食物栄養学科の教職員が協力参加
埼玉西武 ライオンズ	十文字学園女子大学 授業研究会 ／ 十文字学園女子大学との連携協力に関する基本協定に基づく協働事業として実施しました（5月地域活動レポート）
	WFPウォーク・ザ・ワールドinメットライフドーム ／ 連携協定を締結している埼玉医科大学、十文字学園女子大学、駿河台大学の学生が運営スタッフとして参加いたしました（6月地域活動レポート）
	新座市・十文字学園女子大学共催親子で体験！野球教室 ／ 新座市とのフレンドリーシティ連携協力に関する基本協定協働事業、十文字学園女子大学との連携協力に関する協働事業の一環として実施しました（10月地域活動レポート）
	新座市・十文字学園女子大学「親子でベースボール体験」／ 新座市とのフレンドリーシティ連携協力に関する基本協定協働事業、十文字学園女子大学との連携協力に関する協働事業の一環として実施しました（1月地域活動レポート）

2 その他のメディア

テレビ局	放送日	放送内容
テレビ埼玉	2017.9.14	【ニュース930】 ～フィンランド発の子育て支援「ネウボラ」が埼玉で～ 9月9日開催の「ネウボラ国際シンポジウム」：平成29年度地域志向教育研究費採択研究プロジェクト「親の主体的な子育てを可能とする地域支援の在り方の検討」幼児教育学科教授 向井美穂
J:COM	2017.10.23	【ディリーニュース（練馬・新座・和光エリア）】 10月21日開催の埼玉西武ライオンズ・新座市・本学共催事業「親子野球教室」
J:COM	2017.12.4	【ディリーニュース（練馬・新座・和光エリア）】 12月2日開催の十文字元気プロジェクト「プラスちゃんといっしょ」イベント
NHK総合	2018.1.20	【首都圏ニュース】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興＆新座活性化!! ～」イベント
テレビ埼玉	2018.1.20	【ウィークエンドニュース】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興＆新座活性化!! ～」イベント
J:COM	2018.1.20	【ディリーニュース（練馬・新座・和光エリア）】 1月20日開催の十文字元気プロジェクト「くまプラスウィーツプロジェクト～熊本復興＆新座活性化!! ～」イベント

地(知)の拠点整備事業 平成29年度実績報告書

新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり

- ◆【発行日】 平成30年7月
- ◆【発行】 十文字学園女子大学 地域連携推進機構
- ◆〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555 (代表) FAX 048-478-9367



本学マスコットキャラクター
プラスちゃん

十文字学園女子大学 地域連携推進機構

〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28

TEL. 048-477-0555 (代表) 048-477-0958 (直通)

FAX. 048-478-9367

URL. <http://www.jumonji-u.ac.jp/>